

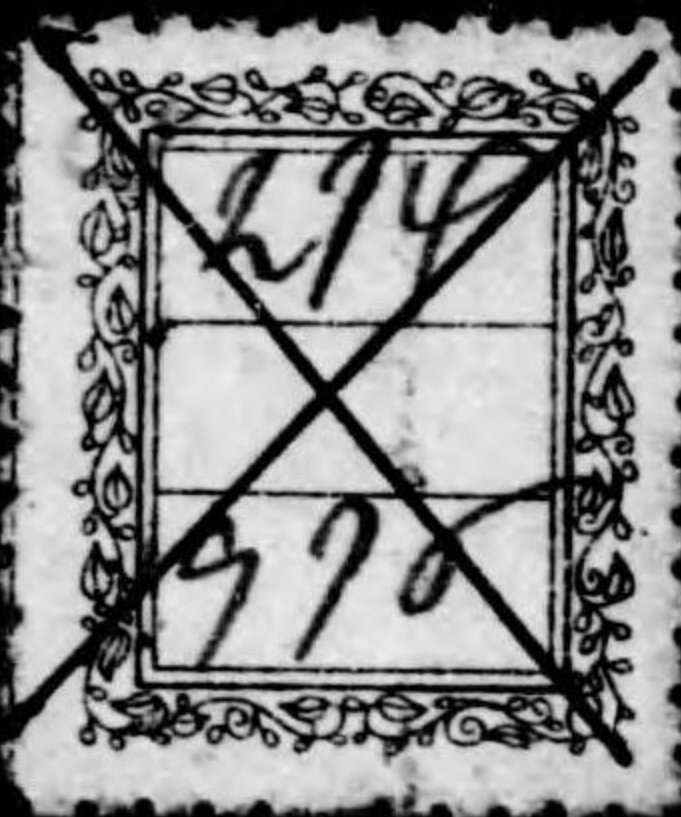
特 100

370

書叢ギカア

鴨

作ンセブイ



始



持100
370



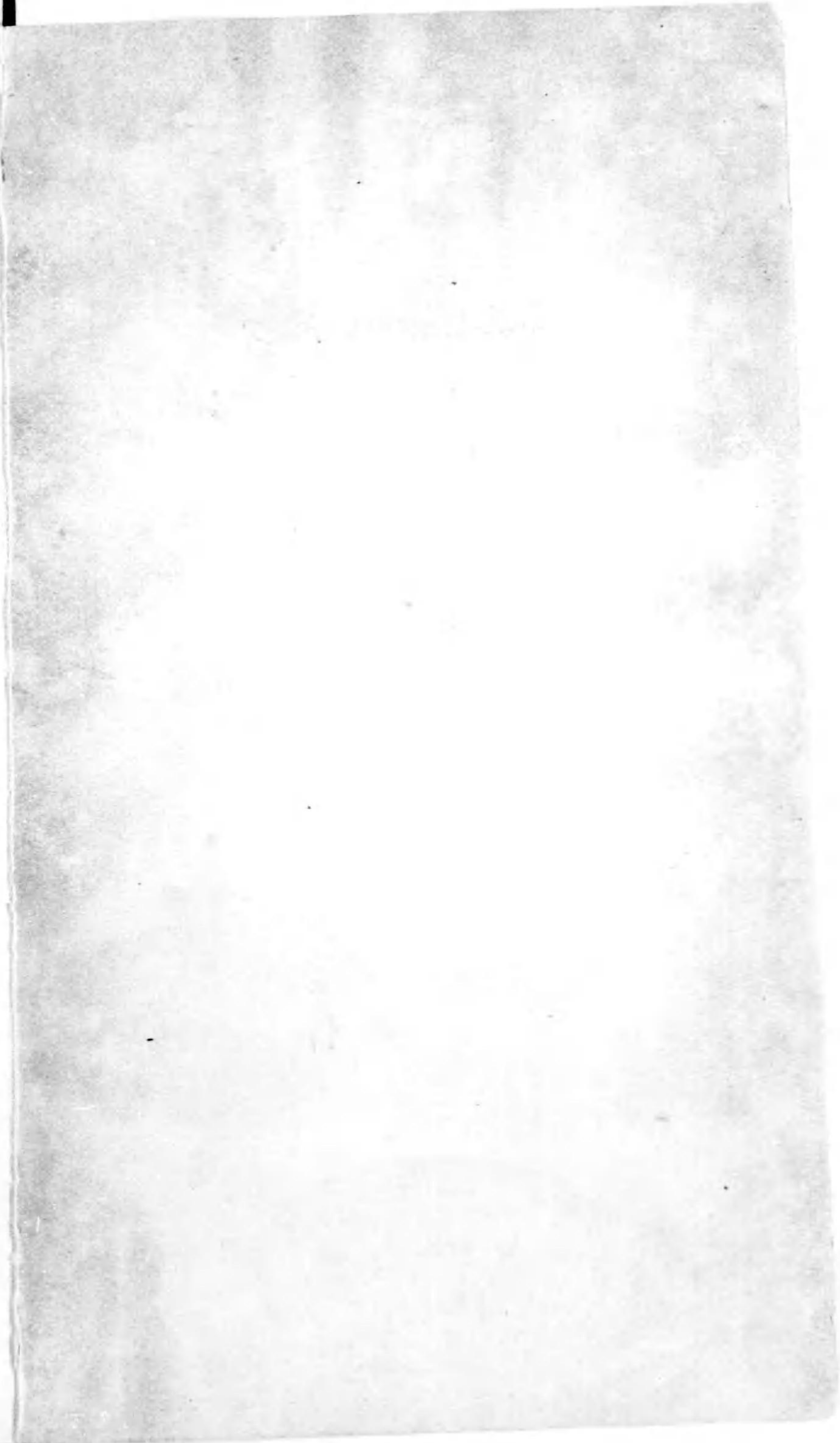
編九卅第書叢ギカア

那威文豪

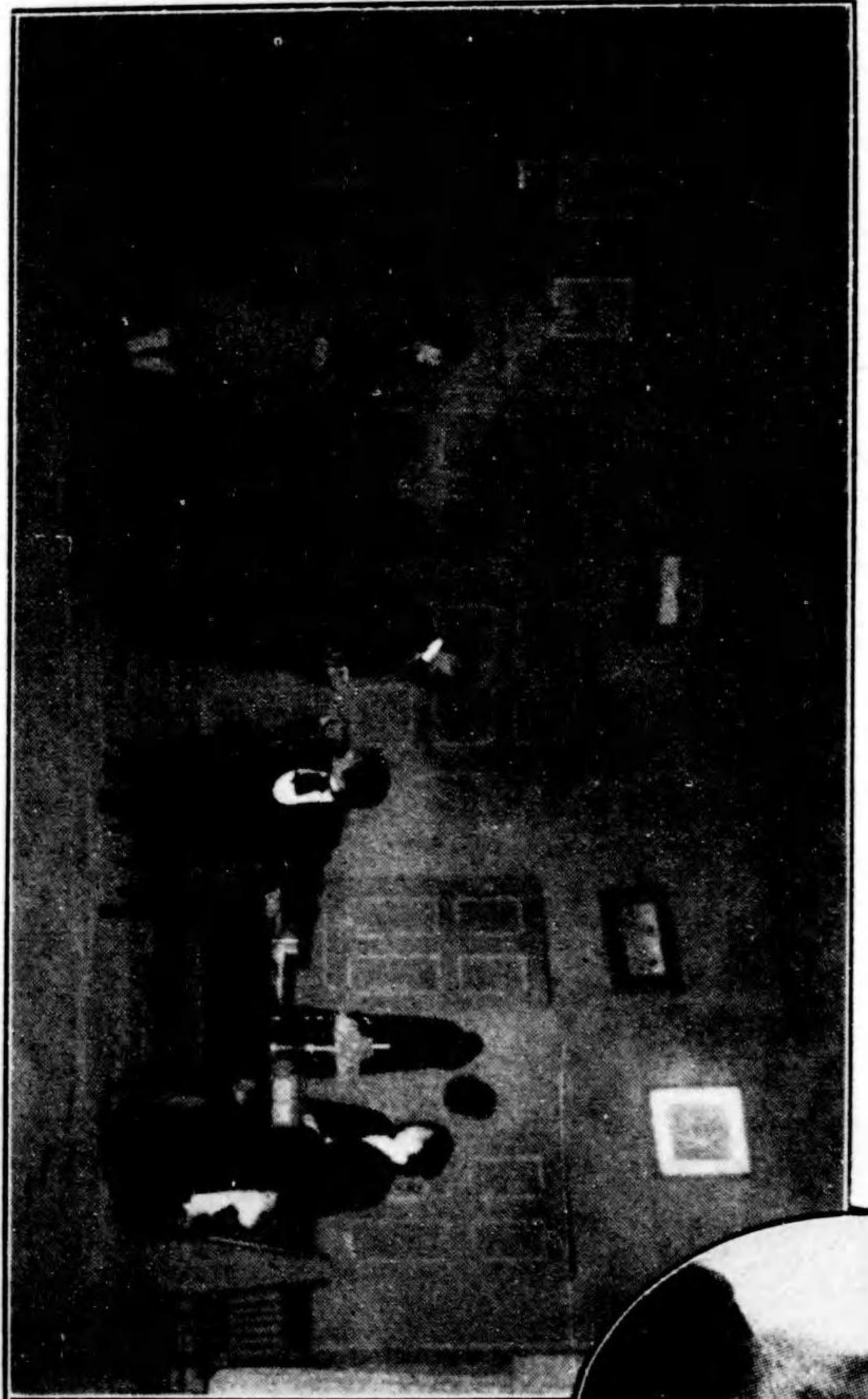
鴨

ヘンリック・イブセン作

大正
3. 9. 17
内交



面臺舞の家ルダクエ日幕二 『鳴』



父 娘 スルダエシク アマルヤ ナイギ

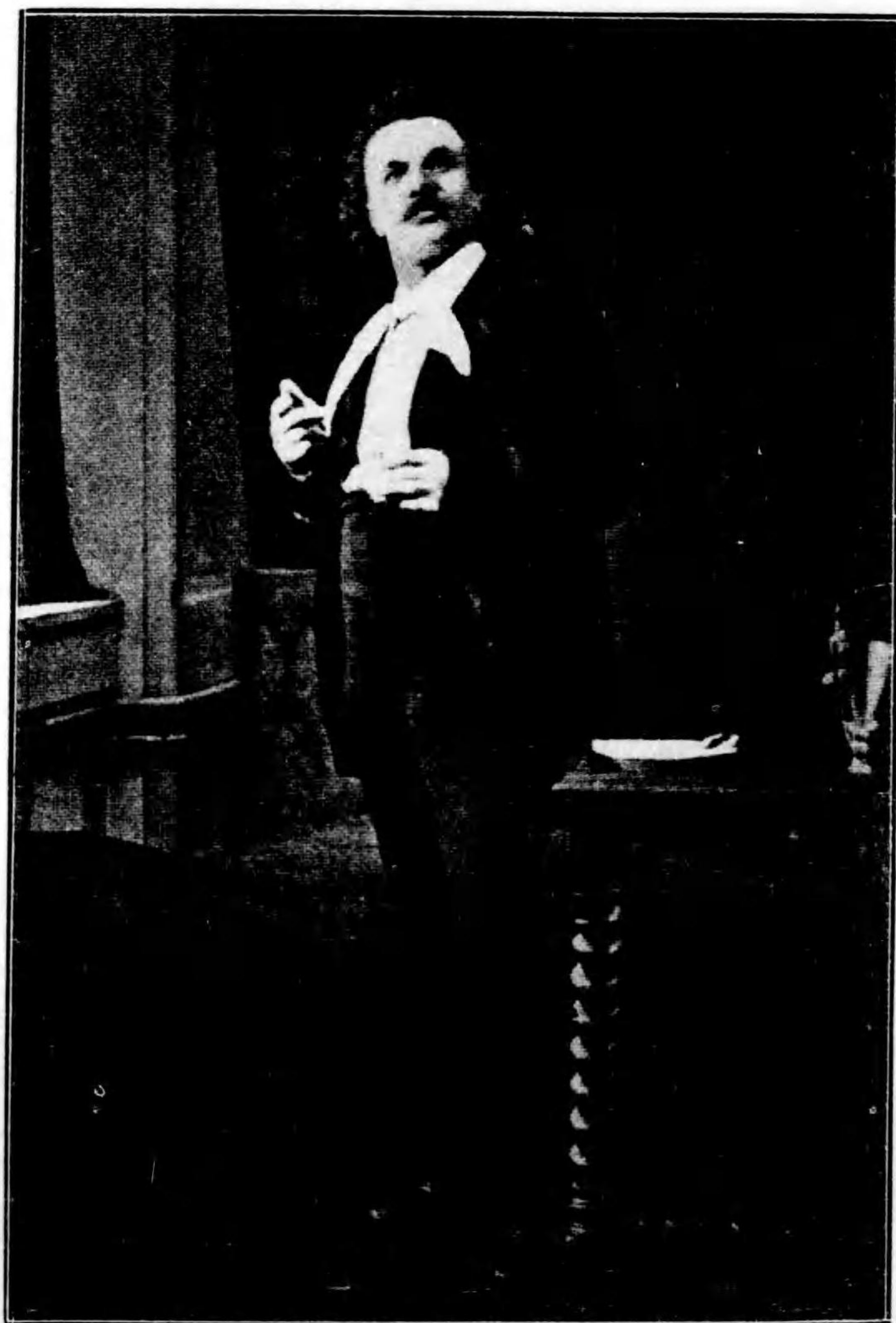


原著者
ヘンリック・イブセン

アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の『書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し』との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が菲才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

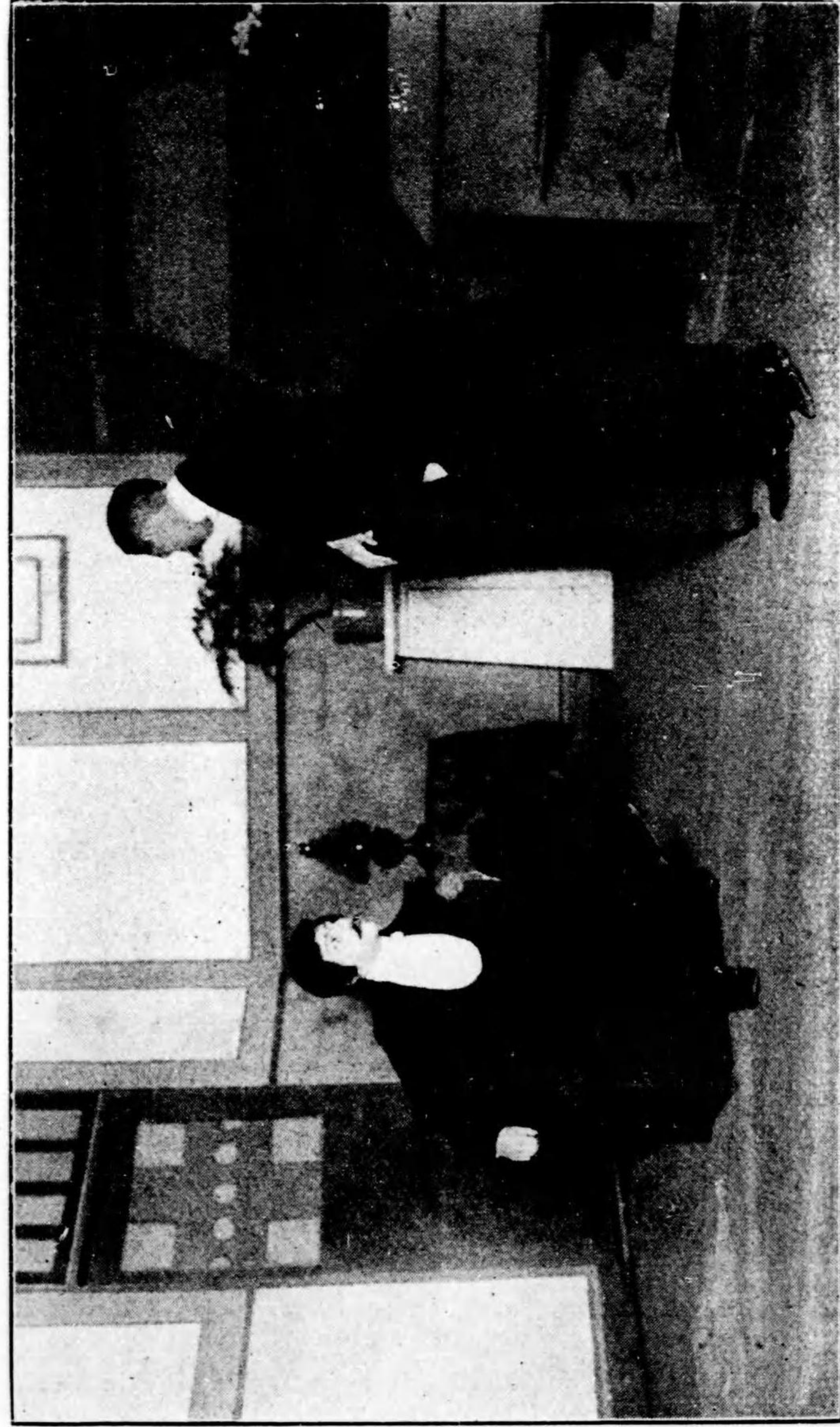


ルダクエ・アマルヤの装扮

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず
 閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する
 に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢
 にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。
 如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。
 依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫
 の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと
 す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。
 希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白



『鳴』第一幕エル家舞台の面

『鳴』五幕エル家舞台の面(死のヒッキン)





(装扮子米井酒) 娘 (装扮助之猿川市) アマルヤ

解題

ヘンリック・イブセンの『鴨』(Vildanden)は千八百八十四年、十一月に發表された。

この題號の依つて起るところは、エクダール老人が、エルレエの下僕ベテルセ
ンから貰つた傷ついた野鴨である事は論を俟たぬ。この鴨と、それから明を失
ひかけてゐる少女ヘドキツヒとが、この現實曝露の悲喜劇の中にあつて、
カナリ神秘的、象徴的の役目を勤めてゐる。その他はすべて、眞實を語る悲劇
的滑稽人物と、虚偽に生ける喜劇的悲劇人物とのすれつもつれつする世相の矛
盾、人生の撞着を、悲慘と思はれるまでに忌憚ない筆で描かれてゐる。

そして、この戯曲の中に出て来る二箇の全く相反した人物、即ち、一人は理
想家で、他の一人は實際家、一人は飽くまでも眞を語つて行かうとする人、一
人は何處までも虚偽のもとに、それを利用して人を助けて行かうといふ醫者、

このグレエゲルス・エルレエとドクトル・レリングとは、作者たるイブセン自身の性格の二方面であると解されてゐる。さういふ事を知つてゐて讀むのも、亦一興であらう。

兎に角、これはイブセンの作中でも、傑作の部に屬する方で、作者自身も得意の作であるらしく思はれる。

理想家の破滅、これはイブセンにあつては定例で、且つ得意な題目のひとつである。

尙、この劇は、親友市川猿之助君などに依つて、昨年の初夏、有樂座に於て初めて上演され、非常な喝采を博した。今本書に、その時の舞臺面を挿入することを快諾された同君に對して、茲に深く感謝の意を表す。

淺草の下町にて

編者識

大正三年六月三十日

鴨

那威　ヘンリック・イブセン原作
村　上　靜　人　編

發端

ヤルマア・エクダルの家は、元はかなりの暮しをしてゐた。ヤルマアの父親エクダル老人は、軍職に就いて居て、立派な身分の者だったが、ある時、紳商エルレエと組んでした、或る山林のことで罪に問はれて、獄に下るやうになつた。それからと言ふもの、エクダル老人は、全くの日陰者となつて、出獄してからも、息子のヤルマアの厄介になつてゐた。そして相も變らずエルレエ家の事務所の仕事を分けて貰つて、寫し物か何かで、小遣取りをしてゐた。息子のヤルマアもエルレエ家には一方ならぬ厄介になつて、現に寫眞を寫す技術を習

はして貰つた上に、もとエルレエ家で働いてゐた、ギイナ・ハンセンといふ女を妻に娶るやうに世話して貰つた。ヤルマアは、ギイナとの間にヘドキツヒと呼ぶ、今年十四になる女の子を一人有つてゐた。

エルレエの一人息子グレエゲルスは、ヤルマアとは友達であつたが、一風變つた性質で、早くから自分の家を出て、父の所有してゐるヘエダルの仕事場の方へ行つて、其處で當り前の月給で、當り前の書記と一緒に成つて働いてゐた。ところが或る時、この息子が山の仕事場から、父の許へ一寸歸つて來た。そこで、父親のエルレエは、その爲めに客を呼んで、自分の家で宴會を開いた。舊友としてヤルマアもそこへ呼ばれた。エルレエの妻君は、ずつと以前に死んで了つてゐた。彼は今では、ゼルビイと云つて、家の取締をしてゐる女と譯があるやうに言はれてゐた。エルレエは若い時分から、なかく女好きだつたと言ふ評判のある男で、今度宴會を開いたのも、實はそのゼルビイと結婚する下準備とも思はれた。

一 一

宴會の當夜。

エルレエが食卓で、ゼルビイ夫人に就いて、お追従を述べ立てた。食事が済むと、夫人が先き立ちで、お客を音楽室へ導いて、そこで珈琲を出したり、何か一曲聞かせようといふ仕組だつた。エルレエは通り過ぎるお客の人数を勘定しながら、息子に呷いた。

『ねえ、グレエゲルス。私はじめ、誰れも心付かなかつたが、お前も心附かなかつたかね。食卓は十三人（基督最後の晩餐が十三人なるを以て、これを忌む。その外十三といふ数を西洋にては忌むなり。）だつたらう。え、平常のお客は十二人なんだが。』と言つて、最後に立つてゐるヤルマア・エクダルの方をデロリと見やつた。そして、その顔には、幽鬱な色が上つてゐた。けれども、直ぐ舊の顔色に返つて、

『さあ、皆さん、此方へどうぞ。』と、他の客人の方へ向いた。

『ねえ、グレエゲルス君。僕を呼んでは可けなかつたんでせう。』

書齋へ二人取り残されると、直ぐ、ヤルマアがかう言つた。グレエゲルスは、そんな事は構はないと言ふやうに、

『だつて、僕の爲めに催された宴會へ、たつた一人の親友を呼ばずに置かれるものかね。』

『でも、君のお父様は、それを欲しなかつたらう。その筈さ。僕はこれまで、一度も當家へ呼ばれた事はないんだから。』

『それは僕も聞いたよ。けれど、僕は君に會つて、話し度いのだ。僕も又直ぐ出立つて行かなければならないのだから。ねえ、學校を出てから、随分長い事會はずに居たねえ。最早十六七年になる。君は、近頃どうだい。かう見た所、却々立派だね。身體も肥つて、恰服が好くなつたぜ。』

『さうでもあるまいが、まあ、あの頃から見れば、少しは一人前らしくなつた

と思ふよ。だが、内幕はお話にならないんだ。君も知つてゐるでせう。僕の一家の悲運を。』と、目を曇らせた。

グレエゲルスも調子を低めて、

『時に、君のお父様は、今はどうして居るね。』

『いや、その話は廢めにしよう。ねえ君。無論、僕と一緒に。他に世話の爲手はないもの。察して呉れ給へ。話をするのさへ情ない始末だ。それよりかも、君はどうして居たんです。』

『僕かね。僕は寂しいけれど、まづ、愉快な時を過してゐたのさ。いろ／＼の事を考へる暇も澤山あつた。マア、此方へ掛け給へ。緩り話さう。』

と、グレエゲルスは暖爐の傍の安樂椅子に掛けた。ヤルマアも、勧められて直ぐ傍の椅子へ腰を下した。そして言つた。

『然しね、グレエゲルス君。お父様の家の宴會へ、僕を呼んで呉れたのは感謝します。君が僕に對して抱いて居られた悪感情を、打棄つて呉れたといふ證據

になるから。』

『え、悪感情？何だつて、そんな事を思つてるんだい。』

『先には、さうだつたよ。あの事件の後さ。それは無理もないよ。何しろ、君のお父様まで、危なく彼中へ捲き込まれようとしたんだから。』

『どうして、それが悪感情の基になるのだらう。誰れがそんな事を言つたね。』

『僕は知つてるんだ。グレエゲルス君、君のお父様が、自身でさう被仰つた。』

『え、父が。あゝ判つた。それで君はたゞの一遍も、僕に便をしなかつたんだね。君が寫眞師になると決めた時にも。』

『あゝ、お父様は、君に言はないが可いと被仰つたからね。何事に依らず。』

『うん、さうかも知れない。』グレエゲルスは、相手の顔を眞面に見て、『時に、

ヤルマア君。君は現在の位置に満足して居るのかね。』と聞いた。

『あゝ。別に不足を言ふこともないからね。尤も、初めは少し變だつたが、何しろ一家の悲運と言ひ、續けて學校へ行く見込は立たず、五十錢の金銭もない

上に、あるのは借財計り、尤も、それは重に、君のお父様から借りたのだと思ふが。そんな譯だから、寧ろ今までの關係を、一變する方が好いと思つたのだ。尤も、それを勧めて下さつたのは、君のお父様で、それから、色々と面倒を見て下さるのさ。』

『僕の父が。』とグレエゲルスは聲を高めた。

一 一

ヤルマアは、更に話を續けた。

『さう。知つてるでせう。え。僕が寫眞の方を稽古したり、それで開業したりする金銭を、何家で手に入れたと思ふ。却々君、容易な金額ぢやあないんだぜ。』

『その金を、父が出したのかい。』

『さうなんだ。君は知らないのか。僕は又お父様から、君に言つて上げた事と許り思つてゐた。』

「父は、君の事に關係してゐるとは、一語も言つて寄越さないんだ。手紙はいつも用事だけだからね。で、それが僕の父なのだね。」

「さうなんだ。世間へ知れる事を好まなかつたのだが、兎に角お父様なんだ。僕を結婚させるやうにして下すつたのも、君のお父様なんだ。君、知らないのか。」

「うん、一寸も知らない。」と言つたが、グレエゲルスは相手の腕を掴んで、

「ヤルマア君、僕は君の話聞いて、大いに嬉しい。僕は、餘り僕の父に對して、可哀想な見方をしてゐたと思ふ。父にも、何處かに善いところがあると思へる。何しろ、父に關して斯ういふ事を聴くのは、どれ程嬉しいか知れないよ、君。時に、君は結婚したと言つたが、どうだい、家庭の具合は。」

「お庇で、マア妻としては申分のない女だ。その上、教育もない方ではない。ねえ、君。人生自身が教育だからね。僕と一緒にゐるし、立派な人を一人二人知つてゐるから、さういふ人達も家へ来る。君は、もうギイナを見ても、忘れち

まつて居るだらうねえ。」

「ギイナ？」と、グレエゲルスは思ひ出せぬ様子であつた。そこでヤルマアは、「君のお母さんが、長らく病氣だつた時、君の家の家事取締に来てゐた女だ。」と説明した。グレエゲルスは、漸く思ひ出せたといふ様子で、

「だが、ヤルマア君。君はどうしてギイナと知合になつたね。君の細君と。」

「何でもない事なんだ。ギイナは、當家にはさう長くは居なかつたのさ。何しろ、君のお母様の御病氣や何かで、種々と取込みがあつたから、彼女も勤まらないうで、お暇を貰つた譯だ。確か、お母様の亡つた前の年か、その年だつたか……。」

「その年だよ。その時に、僕は最早、山の仕事場へ行つて居た。」

グレエゲルスは、かう言葉を挟んだが、又直ぐ訊ねた。

「で、それから？」

「それから、彼女は家へ歸つて、一年位も母親と一緒に居たらうか。彼女の母

親は、ハンセンさんと言つてね、小さな食物屋をしてゐたが、どうして却々よく働くしつかり者さ。そして、明いてる部屋を借さうとしたのだ。一寸綺麗で、居ごゝろの好い部屋さ。

『それを、君が借りたといふ譯かね。』

『あゝ、それもこれも、君のお父様のお勧めさ。そこで、僕はギイナと知つて、婚約をするやうに成つたのだ。年頃の者を一緒に置けば、さうなるのは當り前だからね。』これを聞くと、グレエゲルスは突つ立つて、

『では、君達が婚約してからなのだね、僕の父が何したのは。……その、君がだね、寫眞の方を初めたのは。』

『さう、さうなんだ。何しろ、早く家を持たうと思つたからね。それには、寫眞家が一番可からうと、お父様も被仰るし、僕もさう思ふ。ギイナも同じ意見で。それから又、こんな都合の好いこともあつたのだ。ギイナが寫眞の修整をする事を知つて居てね。』

『それは又、奇態にうまく合つたものだね。』

『ほんとにさ。』とヤルマアは、嬉しさに堪へられないやうに、席を立つて、

『全く奇態だつたねえ。』

『さうだね。で、僕の父が君にとつては、運命と言ふ役割を勤めてゐるのだね。』

『君のお父様は、友達の子供が落魄しても、見棄てずに、よくお世話をして下さつたのだ。いや、ほんとに善い方だねえ。』と、ヤルマアは感激して言つた。

一 の 三

そこへ、このゼルレエ家の取締をしてゐるゼルビイ夫人が、主人ゼルレエの腕に寄りながらやつて来た。彼女は、主人に向つて、

『貴方、あんな所で燈火を見詰めた儘、何時までも坐つて被居つては、可くありませんよ。お眼の爲めには悪うござんすわ。』と云つて、注意した。主人は眼

が悪いので、或は近々視えなくなるだらうと、密に醫者から忠告されてゐるのである。

『お、それはさうだが。』と言つて、主人はゼルビー夫人から手を離して、眼を擦つた。

その中に、客人が書齋へ戻つて來た。召使は、ボンスの盃を一同に渡して廻つた。エルレエはヤルマアの方を向いて、

『エクダル君、君は何を調べて居るんだい。』と訊いた。

『え、寫眞帖を拜見して居るんです。』とヤルマアが答へた。

『寫眞帖？や、どうも、御許賣柄だけある。』と、客の一人が傍から言つた。客人は皆笑つたり、串戯を言つたりしてゐた。けれども、ヤルマアは始終黙つてゐた。グレエゲルスは見かねて、その傍へやつて來て、

『君も、何か言はなければ可けないぜ。』

と、細聲で言つた。ヤルマアは身悶えして、

『何を言つたもんだらうねえ。』と思ひ煩つた。そして、辛との思ひで口を出せば、いつもへま許りやつた。客人が談笑してゐる時、事務所の方から會計方のグロオベルグが、書齋の方を窺つて、

『失禮、彼方の扉を閉められて了つたものですから。』と云つた。

『又閉められたのか。では、此處を通つておいで。』と、エルレエが言つた。

『でも、もう一人、他に人が居るものですから。』と會計方は躊躇した。

『いや、構はない。二人とも通つておいで。何も怖れることはないから。』

グロオベルグが、事務所から出て來る後について、毛の摺切れた、襟の高い外套を着て、指の出た毛糸の手袋を穿めた手には、杖と毛皮の帽子を持つて、腕に褐色の紙包を脇挟んだ老人が現はれた。エルレエはそれを見ると、思はず、『あゝ』と口走つた。客人達は皆聲を収めて、笑つたりする者もなくなつて、皆、テレてしまつた。その中でも、一番驚いたのは、ヤルマア・エクダルだつた。その見すばらしい老人は、彼れの父親、エクダル老人であつた。ヤルマア

は、流石に肩身を狭く感じて、飲みかけの盃を下に置いて、暖爐の方へクルリと向いた。

『眞平御免、とんだお妨げをします。向ふの扉が閉つたものですから。』

エクダル老人は、上を向かずに、たゞ口の中で呟きながら、通りがけに左右へ頭を下げた。

『グロオベルグ奴ツ』と、二人が通り過ぎると、直ぐ、エルレエは忌々しさうに、斯う言つた。

グレエゲルスは、ヤルマアの傍へ行つて、「あれは、確か君のお父さんだね。」と聞いた。ヤルマアは、もう居たゝまらなくなつたので、客人達が、他の部屋へ皆立ち去つて、グレエゲルスと二人切りになつた時、沈んだ調子で、

『グレエゲルス君、僕はもうお暇しよう。一度、運命に押へつけられた奴は、……ねえ君。お父様に宜しく。』と云つた。

『あゝ、宜しい。君はずつと家へ歸るんだらうね。』

『えゝ、どうし。』

『なに、事に依つたら、君の所へ上らうかと思ふから。』

『いや、それは可けない。來ないで呉れ給へ。汚い所だから。殊に今夜のやうな、素張らしい宴會の後では尙のことだ。町の何處かで會ふことにしようぢやないか。』と、話してゐる所へ、ゼルビイ夫人は彼れの傍へ寄つて來て、

『エクダルさん、もうお歸り。ギイナさんに宜しくね。いづれお伺ひしますつて、さう被仰つて下さいな。』と云つた。ヤルマアは、厚く禮を述べて、他の來客に知れないやうに、密と歸つて行つた。

一 の 四

來客の一人が、手に樂譜を一枚持つて、戸口へ現はれた。

『ゼルビイさん。短いものを一つ、願はれませんか。』といふと、

『えゝ、何か致しませう。』と云つた。すると、

『よう、よう。』と、來客は一同喝采した。

夫人は先きに立つて、一同と共に部屋を出た。エルレエは机の前に腰を下して、何か見て居たが、グレエゲルスが行かないのを見て、自分の方から出て行くとして、歩き出した。

『あゝお父様。一寸待つて下さい。』

と、グレエゲルスが呼んだ。エルレエは立ち止つて、『何だい。』と言つた。

『一寸、お話し度い事がありますが。』

『皆さんのお歸りまで待てまいか。私等二人きりになるまで……』

『えゝ、待たれません。もう私等二人きりになるやうな事はないでせうから。』

『何だつて。』と云つて、父のエルレエは息子の傍へ寄つた。その途端に、音楽室の方から、洋琴の音が聞えて來た。

『お父様。あの一家は、あんなに落魄でも構はないんでせうか。エクダル一家の事ですよ。あの中尉と貴方とは、一時彼れだけ親密な間柄だつたではありません。

せんか。』と云つて、共に事業をしたあのエクダル一家が、今悲境に陥つてゐるのを、捨てて置くのは可くないと云つた。父のエルレエは、『イヤ、山林の地圖を偽造したのも、官林の樹木を盗伐したのも、皆あの男で、私は一切あの男に任せて置いたのだから、私は少しも知らない事だ。だから、あの男は有罪となり、私は放免となつたのだ。併しどつちにしても、もう世間で忘れてゐる事だから、今更洗ひ立てする必要はない。』と云ふと、グレエゲルスは、

『ですけれど、あの可憐なエクダル一家の人は。』と云ひ掛けて口を噤んだ。

『お前は、私にどうしろと言ふんだ。エクダルが出獄當時は、もう全くの廢れ者で、どうもかうも成らなかつたのだ。世の中には、彈丸の二つも食ふと、底へ洗んで了つて、二度と再び浮び上れない者もあるからね。だが、グレエゲルス、これ丈は信じてお呉れ。私は自分の現はれない限り、詰らない嫌疑や噂に上らない程度で、出来る丈のことは爲てゐるんだ。エクダルには事務所の寫物をさせて居るが、仕事よりはずつと可い賃錢を出してゐるのさ。』

『さうでせうさ。』と、グレエゲルスは外方を向いて言つた。
 『何を笑ふんだい。お前は信じないんだね。私も帳簿を見せて證據立てるといふ譯にも行かないが、何しろ、そんな拂ひは一々書き入れて置かないものだから。』

『それはね。帳簿に書き入れて置かない方が好い支出も随分あるでせうよ。』

グレエゲルスは、冷かに微笑んで、斯う言ひ放つた。父親は飛び上つて、

『な、なんだつて。』と叫んだ。

『お父様、貴方はね。』と、グレエゲルスは勇氣を振り起して、『ヤルマア・エクダルに、寫眞を習はせた費用は、帳簿に書き入れてお置きになりましたかと申すんです。』

『私がか。何だつてそれを書き入れるんだい。』

と云つて、父親のズルレエは、一寸間諛付いた。

一の五

グレエゲルスは、父の間諛付いた容子を見て、更に詞を續けた。

『僕は、それを拂つたのが、貴方だと聞いたからです。又、あの男に家を持たせてやつたのも、貴方ださうですね。』

『これでも、お前は私が、あの一家に對して、何にもして居ないと言ふのだね。』

いや私も、あの一家の爲めには、随分費つたものだ。』

『貴方は、それを帳簿へお書き入れになりましたか。』

『お前は、何だつてそんな事を言ふんだ。』と、父はやゝ不機嫌で問ひ返した。

すると、息子のグレエゲルスは、

『私だけの譯があつて何ふのです。ねえ、貴方がお友達の息子に、そんなに親切を盡すやうになつたのは、何時からです。あの男が結婚するやうになつてからではありませんか。』と、妙に言葉に綾を持たせた。

『なにを、馬鹿な。今頃になつて——。』
 『あの時、貴方は手紙を下さいましたね。事務の手紙を。そして、その二仲の中には、ヤルマア・エクダグが、ハンセンといふ娘と結婚したと書いてありました。』

『それはさうさ。それがあの娘の姓だから。』

『え、けれども、そのハンセンと言ふ娘が、もと、家にゐたギイナ・ハンセンだつて事は、お書きになりませんでしたね。』

『ふん、お前が、以前家にゐた女に對して、そんなに特別の興味を有つて居ようとは思はなかつたからね。』と、ゼルレエは強ひて嘲笑を浮べながら言つた。息子のグレエゲルスは、低聲になつて、

『私ではありません。が、未だこの家に、あの娘に對して、特別の興味を有つてゐた人がありましたね。』と、妙に言葉を濁らした。すると、

『何んだ。お前は何を言ふんだ。豈乎、それが私だと言ふんではあるまいね。』と、

父のゼルレエは、怒りに聲を震はせて、斯う言つた。

『さうです。貴方のことなんです。』と、クレエゲルスは斷然言つた。

『お前は、そんな事を思つてるんだね。それに又、あの恩知らず奴の寫眞屋が、そんな事を吐かしたんだ。』

『いや、ヤルマアは何にも言ひはしません。恐らく、あの男は、何にも知らないてせう。』

『では、何處で聞いた。誰れがそんな事を言つた。』

『お母様です。あの不幸なお氣の毒なお母様が、最終にお目に掛かつた時、さう被仰いました。』

『お前の母が。あゝ、さうか。お前と彼女とは、いつも同腹だつた。お前を、私に反對させるやうにしたのも、彼女なんだ。』と云つて、父は死んだ妻を罵つた。息子のグレエゲルスは、「決してお母さんの故ではない。本當にお母さんは、不幸のうちに死んだ人だ。」と辯解した。父は更に、「お前位の年配には、親の噂

や、蔭口に愛身を寢す暇に、もつと爲めになる事をするもんだ。」と詰つた。グレエゲルスは點頭いて、

『さう、さうです。私も、全く何か爲なければならぬ時なんです。』と、意味ありげに云つた。すると、父のエルレエは、良泌りとして、「さうさ。さうすれば、お前も愉快と云ふものだ。一體私には、お前の量見がよく解らないが、あんな山の仕事場で、書記と一緒になつて、一定の給料の外、一文も取らずに働いてゐるなんて、莫迦げた話だ。或は私の世話にならず、獨立でやる考へだらうが、それよりも、丁度歸つたを幸ひに、お前も會社の組合人になつて、此處で一緒に仕事をして呉れ。私も今では、昔ほど仕事も出來ず、それに眼も悪いから、私の方が山へ行かう。元來、私とお前との間には、種々行き違ひがあつて、今まで障壁はあつたけれど、根を洗へば、親子なんだから、萬事うまく話が付くだらうと思ふが、どうであらう。」と云ふやうな、和解の相談を持ち掛けた。すると、息子は、

『それも、外面だけと被仰るのでせうね。』と、皮肉に出た。

『うん、マア、それでも可い。が、ひとつ考へて見てお呉れ。グレエゲルス。お前は難しいと思つてるのかい。え、』と云つて、息子の顔を見た。

やがて、グレエゲルスは、冷やかに父親を見詰めて、

『で、この裏面には、曰くがあるんでせう。何かで、私が使はれるのですね。』

『それはお前、親子だもの。お互に持つ持たれつは當り前さ。私は少しの間、お前に家に居て貰ひ度いのだ。ねえ、グレエゲルス、私も寂しい人間だ。一生

涯、いつも寂しい思ひをして來たのだ。就中、年を取つてからといふものは、

又格別だ。誰れかに、自分の傍に居て貰ひ度い——』

『ゼルビーさんが居るぢやありませんか。』と、グレエゲルスは一本突込んだ。

『うん、彼女がある。あの人はまあ、今ではなくてならん人になつた。いつも快活で、元氣で、私を面白がらせて呉れるが、これが長く續けば可いがね。女と言ふ奴は、直ぐ噂の種になる。すると、男も好い心持はしない。第一、女

はそんな位置に止まつて居やしまいと、私はそれに氣を揉んでゐるんだ。よし、その女がだ、世上の噂を氣にしないでともだね、その、お前はどうか考へるかね。お前一個の進んだ考で。』

『お待ちなさい。お父様。なるべく手短かに被仰つたら可いでせう。貴方は、あの女と結婚しようと思つて被居るのですか。』と、息子は、父の謎を解して遣つた。

『と思つて居たら、お前はどうか。どこ迄も反對する了簡かね。死んだ母親に對する敬愛の念から。』

『いえ、そんな事はありません。豈乎、それ程の神經質でもありませんからね。』と云つたが、聽て又、グレエゲルスは、

『あゝ、辛と判つた。』と云つて、父親の顔を見詰めて居たが、更に又かう言ひ足した。『貴方が、私をお使ひにならうとした事が。』

『何、お前を使ふ、何てことを言ふんだい。』と父は息子を詰つた。

『言葉なんぞ構はないでせう。誰れも聞いて居ませんから。』

と、グレエゲルスは一寸笑つて、

『で、私が御用だつたのですね。ゼルビーさんの爲めに、私等は此處で家庭の眞似事をするんですか。孝行息子の役割をね。こいつあ新らしいでせう。』

『お前は、何だつて、そんな風に喰つて蒐るんだ。』

『お父様。此家に、一度でも家庭らしい事がありましたか。私が知つてからは、決してありません。ねえ、貴方は今となつて、それがお入用になつたのでせう。白髪の生えたお父さんが、結婚すると言ふので、孝行息子が一足飛びに駆けつけたと言ひ立てたら、好い御都合でせうよ。歿つたお母様を酷くしたと言ふ事も、自然と残らない譯ですからね。えゝ、一寸だつて残りませんよ。息子が一遍で拭き去つて了ひますから。』

『グレエゲルス、御前は、それほど迄に、この私が憎いのか。』と云ふと、息子は聲を低めて、『えゝ、私は、餘り貴方に近づいて見てゐたものですから。』と云

つた。

『いや、お前は母親の眼で私を見て居るのだ。が、彼女の眼も、時には曇つた事があるのを覚えておゐて。』

『え、判つてゐます。』と、グレエゲルスは慄へながら、『けれど、もしお母様に、さう言つたお氣の毒な短所があつたにもせよ。さうさせたのは誰れが悪いのです。貴方や、彼女等のした事です。その最後の女は、要らなくなつた後で、貴方がヤルマア・エクダルに背負はせたあの女です。』

『まるで、母親の言ひ草酷似だ。』

と、エルレエは肩を揺つた。息子はそれにも構はず、

『ね、今あの男は、子供見たいな初心な量見から、欺瞞の真中にゐるんです。そんな女と同一家根の下に居るんです。自分の家庭が、虚言偽の上に立つてゐるとは知らないんです。』と云つて、グレエゲルスは父親の傍へ摺り寄つて、

『貴方の過去を顧ると、打ち碎かれた人々で、一杯になつてゐる戦場のやう

に思はれます。』

『いやどうも、是れでは逆も私等二人の仲は、直りさうにもないね。』と、父が云ふと、

『え、』と云つて、息子は自分を制へて、お辭儀をした。そして、更に、『さう思ひます。だから、最早、出て行きませうよ。』と云つた。

『なんだ、此家を出る。』

『え、私も自分の使命を見つけましたから。』

『なに、使命。それは、何だ。』

『いえ、貴方に言つても、お笑ひになる丈でせうから。』

『私のやうな寂しい人間は、さう笑ふもんじゃない。』

グレエゲルスは行き掛けたが、ふと奥の方の騒ぎを聞きつけて、

『御覽なさい、お父様。今夜招かれた御定連が、ゼルビイさんと目隠しをして騒いでみますよ。では、御機嫌好う。』と言つた。そして部屋を出て行くと、一

しきり奥の笑ひ聲が聞えて来た。エルレエは息子の後を見やつて、
 『へッ、馬鹿奴。あれでも、自分では神経質でないと言つてやがる。』と浴びせ
 掛けた。

二の二

エクダルの家では、妻君のギイナが縫物をしながら、良人の歸りを待つてゐ
 た。娘のヘドキツヒも、笠を冠せた洋燈の灯影に手を翳して、本を讀んでゐた。
 ギイナは、娘の名を二三度呼んだが、ヘドキツヒは氣が付かないので、もう一
 度聲高に、『ヘドキツヒ。』と呼んだ。娘は眼の上に翳してゐた手を退けて、母親
 の方を見た。

『ヘドキツヒや、何時までも本を讀んでゐては可けませんよ。』

『でも、お母様。もう少し。ね、可いでせう。』

『もうお終ひになさい。お父様に叱られますよ。お父様だつて、夜はお讀みな

さらないだらう。』

『だつて、お父様は、本を讀むのが好きではないんですもの。』

と、ヘドキツヒは不承々に本を閉ぢた。そして斯う言つた。

『ねえ、お母様。お父様がエルレエさんの所のやうな、立派な宴會へ呼ばれて
 被來つたと思ふと、ほんとに嬉しくつて。』

『エルレエさんに呼ばれたのではありませんよ。息子さんから、お招ぎを受け
 たのさ。』と云つて、ギイナは、一寸言葉を途斷させたが、直ぐ思ひ出したやう
 に、

『エルレエさんと家とは、何でもないよ。』と附け足した。

『早くお父様がお歸りだと可いわね。妾、ゼルビイさんに頼んで、好い物を持
 つて來て下さるやうに、お約束がしてあるのよ。妾、何だかお腹が空いて來た
 やうよ。』ヘドキツヒが斯う言つた時、入口の戸が開いて、エクダル老人が入つ
 て來た。ギイナはそれを見て、

『おや、お祖父さん、お歸んなさい。今日は大層遅うござんしたのねえ。寫し物がありましたよ。』と聞くと、エクダル老人は、

『あゝ。そら、この包みに一杯。今日は事務所が閉つたものだから、グロウベルグの部屋で待たされたよ。そして座敷を通らせられてね。』と云つて、家根裏の小屋の鴨などを覗き込みながら、

『ふゝ、みんな團まつて寢入つてゐるよ。彼奴は自分で籠へ入つた。』

と獨り言を云つて、自分の部屋へ入つて行つた。

『お祖父様は好いのねえ。あんなに澤山寫し物があつて。』

と、ヘドキツヒが言つた。ギイナも老人の後影を見送つて、

『ほんとに、お氣の毒なお祖父様。あれ丈が、あの方のお小遣になるのだから。』

と云つた。そして、一寸の間、関乎とした。

『未だ宴會は濟まないのせうか。』と、ヘドキツヒが言ひ出した。

『さあ、未だだらうね。』

『お父様は、どんなにお美味いものを召上つて被居るのでせう。ねえ、お母様。』

お父様は屹度御機嫌でお歸りですわ。さうお思ひなさらなくつて?』

『さうねえ。だが、お留守の間に、部屋が塞がたら可いだらうにねえ。』

と、話し合つてゐる所へ、戸が開いて、ヤルマア・エクダルが、外套に鼠色の毛皮の帽子を冠つて、歸つて來た。

『おや、お歸んなさい。もうお歸んなすつたの。』

ギイナと娘は、一時に立ち上つた。ヤルマアは帽子を脱つて、

『うん。他のお客も大概歸つたから。』

『まあ、こんなに早くですか。』と、ギイナが言つた。

『だつて、晝飯の御馳走ではないか。』と言ひながら、ヤルマアが外套を脱がうとするのを、娘と妻の二人は、背後へ廻つて、手傳つて脱がせた。

ヤルマアは禮服を脱いで、普段着に更へた。そして借りて來た禮服を、明朝

早速返すやうに妻に吩咐けた。ヘドキツヒは、父親の短衣を引張りながら、
『お父様。お父様でええ。ね、ね、ね。そんなに焦らしちゃあ厭。』と聊か拗ね
て云つた。

『何だ。何を言つてるんだ。』と、父のヤルマアは、呑み込めない様子で斯う訊
いた。

『好い物を持つて来てやると、お約束したぢやないの。』

『あッ、さうか。それなら悉皆忘れて了つた。だが、一寸お待ち。』
と、上着の衣兜を探しに立つた。

『あゝ、嬉しい。』と、ヘドキツヒが飛び廻るのを見て、母親は、『ね、だから待つ
て被居いつて言つたでせう。』と言つた。

『サア、是れだ。来て御覽。』

ヤルマアは、一葉の紙切を手に持て、それを見せた。

『あら、是れなの。紙つ切ちやありませんか。』

『うん、これが「献立表」と言つて、お料理の名が書いてあるのさ。』
『是れつきりなの。』

『うん。他に何にも持つて来なかつた。が、正直、かういふお料理は、そんな
に美味しいものではないよ。どんな物か話して聞かせるから、此處を御覽。』

『はい。』とは云つたが、ヘドキツヒは、待ち兼ねてゐた土産物がなかつたので、
悲しさらに涙を飲み込んだ。ギイナはそれを見て眼で叱つた。父のヤルマアは
それと悟つて、

『あゝ、主人がどんなに苦しんでるかつて事ア、誰れも知らないんだ。そして、
一寸した事に、すぐ泣き顔だ。可い。それにも直き馴れるだらう。』

と云つて、部屋の中を歩き廻つてゐたが、やがて、妻の傍へ行つて、仕事の
ないことや、部屋の借人の來ないことを話した。

ヘドキツヒは、急に父親の傍へ寄つて、

『お父様とうさんの笛を取つて來ませうか。』と言つた。

『いや、笛なんぞは要らない。私は現世こゝよで楽しい思ひをしようとは思はない。』と、ヤルマアは歩き廻りながら、

『ようし、明日あしたから働くぞ。マア見て居る。力の續く限りは働いてやるから、安心して居るが可い。』

『麥酒ビールを持つて來て上げませうか。新らしい麥酒を。』

と、ヘドキツヒが重ねて言つた。

『いや、私わしは何にも要らない。』と言つたが、ヤルマアはふと立ち止つて、『なに、麥酒ビールと言つたのか、お前。え、さうか。お前が言ふんなら、一本だけ持つて來てお呉れ。』

『さうなさいまし。ね、皆みんなで面白くしませうね。』とギイナも口を添へた。

『ヘドキツヒ！』と、勝手かたての方へ行かうとした娘を捉へて、父のヤルマアは急

いで抱き締めた。『俺一人宴會へ呼ばれて行つた。自分だけは御馳走にありついてゐて、で居て、お前には。』

『まあ、何です。そんな事を。もう、可いぢやありませんか。』

と、ギイナは坐つた儘で、急いで遮つた。ヤルマアは娘を抱へて、

『悪く思つて呉れるなよ。ヘドキツヒ。どんな時でも、俺はお前を愛してゐるんだ。え、判つてゐるだらう。』

『え、です。から、妾も貴方を愛してゐてよ。お父様。』

娘は、父親に兩腕を投げかけて答へた。父のヤルマアは、

『それでね、時に依つて、私が悪い事をしたとしても、お父様には苦勞が澤山あると言ふことを考へてお呉れ。可いかい。あ、こんな時に、麥酒なんぞは欲しかあない。さあ、笛を持つて來てお呉れ。』

と言つて、眼を拭つた。娘はすぐ本箱の傍へ行つて、笛を持つて來た。

『難有う。からやつて、お前たち二人の傍で、笛を手にして！』

ヤルマアはかう言ひ終つて、ボヘミヤの田舎踊の歌を奏てた。そして不意に笛を止めて、妻の方へ手を伸した。

『ギイナ。この貧乏な見すばらしい家は、私等の家だ。ね、ほんとに、私の幸福はこゝに在るんだ。』

誠心を罩めて、斯う言つた後で、もう一度、笛を吹かうとした時、入口の戸を訪れる音がした。

『ねえ、貴方、一寸。誰れか来たやうですよ。』ギイナは良人にかう言つて、立つて戸口を開けた。そして、『まあ』と一足下つた。

『寫眞師、エクダル君は此方ですか。』
と言つて入つて来たのは、グレエゲルス・エルレエだつた。

二の三

ヤルマアは見るより、

『やあ、君、到頭、来たね。さあ入り給へ。だが、今夜どうして、君は宴會を見捨て、来たんですか。』と、不審氣に問ひ掛けた。

『宴會も親父の家も、何方も見捨て、来たんです。』と、グレエゲルスは落着拂つて云つた後で、更に、ギイナに向つて、

『今晚は、エクダルの奥さん。貴方は私がお判りですか。』
『エルレエの若旦那さんが、判らないでどうするものですかね。』

『でも、私は母親に似て居るんですから。無論、母はよく御承知でせうね。』
この時、ヤルマアはふと口を挟んで、

『君は、家を出たと言ひましたね。』
『あゝ、旅館へ泊つて居ます。』と、グレエゲルスが答へた。

『さう。マア外套を取り給へ。そして、この長椅子へ掛けて寛ぎ給へ。』
グレエゲルスは言はれる儘にした。ヤルマアは机の傍へ掛けて、二人は家の話などをした。グレエゲルスが、下宿人があるかと訊いたので、ヤルマアは、

『實は、未だないので驚つてゐるのさ。』と言つた。グレエゲルスは、ヘドキツヒを見かけて、

『君の娘さんは、一人きりかい』と訊ねた。

『あゝ、唯一人だ。あれがね、吾々の生活の悦びでもあれば、又、一番深い悲みでもあるのさ。』と云つて、ヤルマアは力のない聲で云つた。

『と言ふと、何だね。』と、グレエゲルスは不審つた。ヤルマアは悲しげに、

『どうも、眼が潰れさうなんだ。』と答へた。

『眼が潰れる？』

『うん、さういふ徴候が見えた丈で、未だよくは判らないんだ。常人も當分の中は、氣が付かないだらうと醫者が言ふんだ。然し、どうもさうなる事は免かれないやうだ。』

『そいつは、お氣の毒だね。で、どうして又、そんなになつたんだらう。』

『やつぱし遺傳だねえ。』と、ヤルマアは溜息を吐いた。グレエゲルスは思はず、

飛び上つて、

『なに、遺傳だつて。』

『えゝ、エクダルの母親が、眼が悪かつたと申すのです。』

とギイナが代つて答へた。

『その他は御丈夫さうですね。』

『えゝ、お庇様で。』

『成長くおなりになつたら、お母様酷育でせう。ね、奥さん。お何歳です。』

『明後日が誕生日に當りますから、直き十四になるのでございます。』

と、ギイナが答へた。

『全く、子供の大きくなるのを見ると、自分達の年齢が思はれますな。』と、グレエゲルスはかう言つたが、ふと又、『時に、貴方がたが御夫婦になつてから、どの位になりますね。』と訊いた。

『妾達ですか。えゝと、もう十五年になります。』

『ほんとに、さうなりますか。』と、グレエゲルスの言葉が妙だったので、ギイナは、
 『ええ。』と云つたが、急に注意深くなつて、客の顔を見ながら、『さうです。』と答へた。

二の四

丁度その時、父親の部屋の戸があいて、エクダル老人が出て来た。老人が息子に話し掛けると、ヤルマアは立ち上つて、

『お父様、お客様ですよ。グレエゲルス・エルレエ君。貴方は覚えてますか。』

『エルレエさん。息子さんの方だな。』と云つて、續いて座を立つたグレエゲルスを見据ゑて、『私に何の用があつて來なすつた。』

『いや、貴方に用があつてではないのです。會ひに來られたのは私にです。』

『さうか。では、何でもなし。私は怖がつてゐるんぢやないぜ。いいかね。だ

が……』と言つて、老人は兩腕を振つた。グレエゲルスは、老人の傍へ行つて、

『エクダル中尉、貴方の舊の獵場から、御機嫌伺ひに上つたのです。』

『獵場。』

『え、へエダルの奥の仕事場です。知つておゐてせう。』

『あ、さうだ。あの邊の事なら、昔は詳しくかつたもんだ。』

『あの頃、貴方は素敵な銃獵家でしたな。』

『さうさ。それは然うだが』と、老人は相手を見て、『君は、この私の制帽を見てゐるね。家の中で被つてゐる分には、誰れの許可も受けるには及ぶまい。被つた儘で町へさへ出なければ』と、自分が、もと陸軍中尉であつた時の軍服を着てゐるのを辯解した。

『マアお父様。お掛けなさい。グレエゲルス君。萬望君も。』

この時、ヘドキツヒが麵麩と牛酪の皿を運んだので、一同食卓についた。

『エクダル中尉、覚えておゐてですか。ヤルマア君や私が、夏季休暇やクリス

マスに、山へお邪魔をしに行きました。が。』といふグレエゲルスの顔を見て、老人は、

『君が？ いや、覚えて居らん。が、私の銃獵家だつたのは實際だ。私は熊を射つた。九頭も射つた事がある。』と云つた。

『さうですか。では、今は獵においてにならないのですな。』

と云つて、グレエゲルスは、氣の毒さうに老人を見た。

『さう言つたもんではないさ。偶には射つて見るが、無論、昔のやうではない。山林が——』と言ひ掛けて、エクダル老人は、麥酒をひと口やつて、『時に、山

林は今でも盛大にやつてるかね。』

『いえ、貴方がおゐるの時分とは、大違ひです。かなり濫伐しましたから。』

『濫伐した。』と、エクダル老人は聲を低めて、『それは危い。好くないぜ、君。』

山林は復讐するから。』と云つた。

『然し、野外のお好きだつた貴方が、よく斯ういふ所に居られますな。貴方が

あんなにお好きだつたものが、どれもないではありませんか。山の微風とか、鳥獸を相手にした自由な生活とか言ふものが。』

これを聞いた老人は、微笑みながら息子を顧みて、『ね、ヤルマア。どうだい、あれをひとつお目に掛けようぢやあないか。』と云つた。

『いえ、あれは可けません。』と、少し慌て、グレエゲルスに、『何でもないんだよ、君。この次に見せるから。』と言ひ消した。

『ねえ、エクダル中尉、私がこんな事を申したのは、かういふ意なのです。貴方を山林へお連れ申し度い。ね、私もやがて歸るやうに成りませうから。寫し物は向ふにだつてありますよ。此處では、貴方を悦ばせるやうなものは、一つもないでせう。』と、グレエゲルスが老人に話し掛けると、老人は驚いたやうに、

『一つもない、此處では？』

『いや、それはヤルマア君も居ますが、御子息には御家族がおありでせう。殊に、貴方のやうに、自由な、野外の生活がお好きな方には。』

と、グレエゲルスが言つた時、エクダル老人は、卓子テエアルをドンと叩いて、息子むすこに、
 『ヤルマアや、何どうしても、あれをお見せ申さう。』と云つた。
 『え、ですけれど、お父様とうさま。そんな事をしても、詰つまらないぢやありませんか。
 そして最早眞暗もろまっくらですぜ。』

息子の止めるのも聞かずに、

『莫迦まかを言へ。戶外おもては月夜つきよだ。』と、老人は立ち上つて、『どうしても、お見せ申す。さあ、ヤルマア。手をお貸し。』と云つた。

『お父様とうさま、手傳てつたつてお上げなさいな。』

と、ヘドキツヒが口を添へたので、ヤルマアは立つて、老父ておの後に續ついた。

『何なんです。』と、グレエゲルスは、不審ふしんに思つて、ギイナに訊きいた。

『いえ、何でもありません。』と、ギイナは縫物をしながら答へた。

立つて行つた三人が、戸を引き開けると、大きな家根やね部屋べやの天窓まどから、月光げつくわうがところ／＼に差し込んでゐて、その他の所ほかは、暗くつてよく見えなかつた。

『さ、此方こつちへおいで下さい。』と、エクダル老人が言つた。長椅子ながいすの傍そばに立つて

見てゐたグレエゲルスは、皆みんなのゐる所へ寄つて、中を覗のぞき込みながら、

『家禽とりを飼つて被居みらる。鳩つばが居ますね。』と云つた。

『鳩も居ます。家根裏やねうらに巢すをくつて居るのです。鳩といふ奴やつは、高い所に棲とまるのが好きだから。』と、エクダル老人が説明せつめいした。ヤルマアも口を添へて、

『あれで、君、普通ふつの鳩ではないんだぜ。』と云つた。老人は、

『普通ふつの鳩だつて？ どう致いたして。タムブラア(鳩の一種)も居るし、プウタア(同上)も一対いっついゐる。それ、あの箱には兎うさぎが寝て居ます。それからと、ヘドキツヒ、退ひきなさい。お客様お客様にあれを見て頂いたかう。あの、藁わらの入つた籠かごを御覽ごらんなさい。』

と、得意氣とくいげに指ゆびさした。グレエゲルスは覗のぞきながら、

『家禽とりがゐますな。家鴨おひるですか。』

『どんな種類しゆるいの家鴨おひるだと思ふね。』と、ヤルマアが訊きいた。

『大鴨おほがもですか。』

『いや、君。大鴨ぢやあない、——エルレエ君。野鴨ですよ。』と老人が答へた。

すると、

『妾のよ、妾の鴨よ。』と、ヘドキツヒが傍から言つた。

二の五

今まで、雑物をしてゐたギイナは、瓦人の方へ向いて、

『貴方。まるで氷が張りさらに寒くなりましたよ。』

『さうか。では、閉めよう。彼奴等の寝る邪魔をしても可くないからな。さあ、ヘドキツヒ、閉めと呉れよ。』

ヤルマアと娘は、手傳つて戸を閉めた。

『今度よく見てお貰ひ申さう。あれは全く變な鳥だよ。』

老人はかう言つて、暖爐の傍の安樂椅子へ掛けた時、グレエゲルスが訊いた。

『エクダル中尉、貴方は、どうしてあの鴨を捕つたのです。』

『あれは、私が捕つたのではない。あれに關しては、禮を言はなければならぬ

人が町にある。』と言つた時、グレエゲルスは制へ切れないやうに、

『家の親父ではありませんか。』と言つた。

『よう、よく當つたな。さうだよ、君のお父様だよ。』

『だが、君が當てたのは訝しいな。ね、グレエゲルス君。』と、ヤルマアは不審がつた。

『でも、君は家の親父から、いろ／＼貰つたと話したではないか。だから、大方さうだらうと思つた。』

『けれど、この鴨は、エルレエさんから頂戴したんぢやありませんよ。』

と、ギイナが口を出すのを、エクダル老人が、

『でも、この鴨に關して、禮を言はんけりやならぬのは、ホオコン・エルレエさんさ。ねえ、ギイナ。』と、嫁に言ひ聞かせた後で、グレエゲルスに、『君のお父様が短艇を漕ぎ出して、これを射つたのさ。だが、エルレエ君は、此節眼が

悪いでせう。そこで、只傷を負はせた計りだつたのさ。』

『あッ、では、この鴨が弾丸を二發受けたのでせう。そして海底へ沈んだのでしょ。』

『左様。鴨は、いつでもさうするんだ。出来る丈深く底へ潜つて、海藻や昆布などが、ゴチャ／＼生えてゐる中に、確りと噛着いて、二度とは浮き上つて来ないのだ。』と、老人は眠たいやうな聲で言つた。

『でも、貴方の鴨は、浮いて来たんでしょ。エクダル中尉。』

『それは、君のお父様が伶俐な獵犬を有つてゐたからさ。鴨の後から潜つて行つて、獵犬が啣へて来たんだ。』

『それから、君のお父様が、家へ持つて行かれたが、いい具合に育たないので、ペテルゼンに言ひ付けて、殺させようとしたところを——。』

と、ヤルマアが説明すると、老人は半分眠つてゐて、『あゝ、さうだ。あの、ペテルゼンの馬鹿野郎……』と言つた。ヤルマアは言葉を續けて、

『そして、此處へ来たのは斯うなんだ。家の親父が、ペテルゼンを一寸知つてゐるものだから、鴨の話を知りて、此方へ貰ふやうに話したのさ。ところが、この家根裏では、不思議によく育つのだ。大分肥太てね。今日になつて見ると、郊野の生活をする鴨の本性を忘れて了つたのだ。だから何處でも育つのだね。』

之れを聞いて、グレゲルスはよく判つたやうに、

『それは、君のいふ通りだね、ヤルマア君。今後と雖も、空や海は少しも見せない方が好いぜ。時に、僕はかうして居られないんだ。お父様は、お休みになつたやうだね。あ、それから、君は部屋を貸し度いと言つたが、僕に貸して貰へまいか。』と云ふと、

『えッ、君が。』と、ヤルマアの言ふのを、

『いえ、可けませんわ。貴方は。』とギイナが遮つた。

『私では、可けないのですか。もしか、貸して頂けるのなら、明朝、荷物を持ち込まうと思ふが。』と、グレゲルスが云ふと、ギイナは、

エダルの仕事場で、一緒に仕事をしたことがありますから。』
 『あの二人と言つたら、それは仕様のない人なんです。夜は氣儘に出て歩いて、遅くなつて歸つて来るし、そして始終——。』
 と、ギイナが言ひかけた時、グレゲルスは夫れを遮つて、
 『いえ、さういふ事には、直ぐ慣れますよ。この鴨のやうな鹽梅でね。』
 『え、でもマア、お見合せになつた方が、可いだらうと思ひますの。』
 『奥さん。貴方は、私が此家へ参るのが、お厭なのですか。』
 『いえ、どう致しまして。』
 『ギイナ、お前はどうかしてゐるね。』と、ヤルマアは妻にさう言つたが、グレゲルスに向つて、『君は、此町に止まる意なんだね。そして、お父様の家に居ま
 いとすると、一體どうしてやつて行くのかね。』
 『僕が、それを知つてゐたら、こんなへマはやつて居ないだらうに。何しろ、
 情ないことには、グレゲルスと言つて、後へエルレエと来るんだからね。あ

『いえ、でもエルレエさん。あの部屋は、そんなに廣くもないし、明り取りの
 具合も悪いし、それに。』と、何故か、敬遠して貸すまいとする様子である。
 『そんな事は構はないです、奥さん。』と、グレゲルスは又、何か思ふことあ
 つて、借りたい様子である。
 『僕は好いと思ふがね。ギイナ、お前何だつて、そんな事を言ふのかね。道具
 だつて悪くはない。』と、良人のヤルマアが口を出した。
 『でも貴方、下にあんな人が居るぢやありませんか。』
 『どんな人が。』と、グレゲルスが訊くのを、
 『え、一人はもと家庭教師をしてゐた——。』
 と、ギイナが答へた。ヤルマアも口を添へて、
 『それはね、モルキツク君といふのだ。』
 『それに、もう一人はお醫者です、レリングと言ふ。』とギイナが答へた。
 『レリング。』と、グレゲルスは考へて、『あ、あの人なら一寸知つてます。へ

「、こんな忌はしい名で人から呼ばれると……ねえ、君は、こんな忌はしい名前を聞いた事があるかい。チョッ！こんな名に返事をする奴には、唾を引掛けてやり度い。僕見たいに、現世でグレエゲルス——エルレエたるべく宣告された奴は。」

「は、グレエゲルス・エルレエが厭なら、何になるのだい。」と、ヤルマアは笑ひながら訊いた。

「さう。出来ることなら、伶俐な獵犬にでもなり度いね。」

「獵犬に？」と、ギイナが聞き返した。

「まあ。」と、われ知らずヘドキツヒが口走つた。

「恐ろしく伶俐な獵犬にね。海藻や昆布や、水底の泥に確かり啣着いてゐる鴨の後を追ひ掛けて、底まで行くやうな獵犬にね。」

グレエゲルスが斯う言ふのを聞いて、「君のいふ事は、判らないな。」と、ヤルマアが言つた。

グレエゲルスが歸つて行つた後で、ヤルマアは妻に、「お前は變だねえ。あんなに貸したがつてゐた部屋が、塞がるのに、厭だなんて。」と訝し氣に聞くと、

「でも、エルレエさんが、何とお思ひになるでせう。グレエゲルスさんを家へお置き申したら。貴方が悪いやうにも見えますわ。」と云つた。

「さう思ふなら、思はせて置く丈の事だ。それは、エルレエさんは私の面倒を見て呉れたが、それだと言つて、一生涯あの人の支配の下に居る譯にはいかない……。」

「え、けれど、差詰困るのは、お祖父様でせう。グロウベルグからの仕事も、させて貰へないやうになるかも知れませんわ。」

「さうなりや、結句好いだらう。え。俺も男だ。白髪のお父さんに乞食のやうに歩かれるのは、不面目な事だからねえ。なあに、もう直き運が向いて来るさ。私は信じて疑はない。」と、新規の麵麩の一片を取つて、牛酪を塗りながら、「私

は、現世で一つの使命を持つてゐる。今に仕了せて見せるぞッ。」と云つた。
 『え、お父様。ほんとにさうして下さいよ。』
 と、ヘドキツヒが大きな聲を出したので、ギイナは娘の方を見て、
 『しッ！ お祖父様が起きるぢやありませんか。』と、たしなめた。
 それから、夫婦は眠り轉けてゐる老人を、二人してその部屋へ運んだ。

三の一

翌る朝、グレエゲルスは引き移り匆々、何でも自分でするといふ考の下に、
 暖爐の火を點けようとして、節氣開の螺旋を捻り過ぎたと見えて、部屋中煙で
 一杯になつた。それから又、暖爐の火を消さうとして、水瓶の水を皆暖爐の中
 へぶちまけて了つたので、床板は豚小屋のやうに滅茶々々になつた。それから、
 彼れは町へ出掛けた。ギイナはそれを見て来て、驚いて良人に話した。良人は
 又グレエゲルスを初め、階下にある二人のモルキツクやドクトル・レリングま

でも、お茶に招いて置いたからと言つて、妻にその準備を頼んだ。そして、自
 分は寫眞の修整に忙しがつてゐた。エクダル老人は、居間の戸を開けて、『ヤル
 マア、ヤルマアは居ないか。』と言つて、覗き込んだが、其處に立つてゐるギイ
 ナの姿を見て、『あゝ。』と言つた。『お祖父様。何か御用ですか。』と嫁に訊かれ
 て、『うん、何でもないと。』と言ひながら又引込んだ。ギイナは、老人が出て行
 かないやう、それから一寸でも仕事をするやうに、良人に言つた。
 『可いとも、出来る丈やつつけるから。』と、ヤルマアはかう言つたが、妻が勝
 手許へ立つて行くと、直ぐ生欠伸をして、さも仕事の厭さうな様子をした。老
 人の居間の戸が細目に開いて、エクダルは四邊を見廻しながら、微聲で、
 『ヤルマアや、忙しいかな。』と訊ねた。
 『え、是れだけやつて了はなければ。』
 『さうかい。』。そんなに忙しければ……。』
 老人は、斯う云つて、又部屋へ引込んだが、境の戸はその儘に開かれてゐた。

今度はヤルマアが手に持つてゐた刷毛を下に置いて、その戸の側まで行つて、

『お父様。忙しいんですか。』と聞いた。

『お前が忙しければ、私も忙しいんだ。あゝ。』

と、老人は憤然とした聲で答へた。ヤルマアは、『さうですか。』と言ひ捨て、再び仕事にかゝつた。すると、エクダル老人は、又直きに戸口まで来て、

『ヤルマア、私は別段、忙しいといふ方でもないんだ。』と言つた。

息子のヤルマアは、振り返つて、

『でも、貴方は寫し物をしておゐてでせう。』

『うん。だが、あんな物は、グロオベルグだつて、一日二日待たれないといふ法もあるまい。ねえ、何もこれが生死に關する大事といふ譯ではなしさ。』

『えゝ、貴方だつて、あの男の奴隷ではなし。』

『そこで、あの事はどうしたい。』と、老人は家根裏の方を見やつた。ヤルマアは、立つて戸を引き開けて、朝日の輝かしい部屋へ老人を入れてやつた。

『お前も来るかな。』

『えゝ、私は。』と言ひ掛けて、勝手許の方の戸口を見ると、何時の間にか、そこにギイナが立つてゐたので、『えゝ、暇がないんです。仕事があるもんですから。』

あ、それから、あの、新工夫の。』と言つて、綱を引くと、戸の内側から幕が降りた。その上部は綱の目、下部は帆木綿で出来てゐる。ヤルマアは老人と自分との間に隔てを置いて、扱、ギイナの方に向き直つて、暗に妻に言ふやうに、

『さあ、これで少しは静かになつた。』と云つた。

『貴方、お祖父様は、又彼處ですか。』とギイナが訊いた。

『うん。でも、エリクゼンの酒場へ行かれるよりは、増ちやあないか。』

ヤルマアはさう言つて、腰を下した。ギイナが勝手へ行つてから、暫くすると、帆木綿の幕の背向から、『ヤルマア。水槽を動かさなければ可けないやうだが。』と言ふ老父の聲がした。

『えゝ、それは、私がさう言つてゐたんです。』と、ヤルマアはかう返事をした。

が、直ぐに又、仕事に取り掛かった。そして、屋根裏の方を見ながら、卓子から立ち掛けた時、勝手口から娘のヘドキツヒが入つて来た。

『何か用か。』と、ヤルマアはかう言つて、急いで座についた。

『いゝえ、只お父様のお傍に居たいの。』

父のヤルマアは、暫時斷つてゐたが、『お前は、何處へでも嗅ぎ付けに来るんだね。私の張り番をして居ろ、とても云付かつたのかね。』と云つた。

『いゝえ、そんな事を。ねえ、お父様。妾に、何か、手傳へるやうな事がないの。』

『いや、私は自分でする方が勝手だ。それにお前、眼に悪いよ。』

『妾に、刷毛を貸して下さいよう。妾、上手ですから。』

『では、ほんの一分か二分だよ。可いかい。眼を悪くしないやうにね。』

『其位なら、悪くしようにも出来ないぢやありませんか。あゝ妾に出来さうなのがありましたわ。』

『ちやあ、可いかい。』と云つて、父のヤルマアは、幕の端から家根裏へつと入つた。そして、ヤルマアと老人の二人は、何か言ひながら、トシカチ、初めた。そこへグレエゲルスが、平常着に帽子も冠らず、部屋へ入つて来た。

三の二

寫眞の修整をしてゐたヘドキツヒは、振り向いて、グレエゲルスを見て、

『お早うございます。お入んなさいまし。』と云つた。

『難有う。』と云つて、グレエゲルスは家根裏を見て、『大工が入つてゐるのですか。』と聞いた。

『いゝえ、お父様とお祖父様です。貴方の被來つたことを、さう言つて來ませうか。』

『いや、かうやつてお待ちして居ませう。』

さう云つてゐる處へ、ギイナが出て来た。グレエゲルスは見るより、

『少し早過ぎたやうでしたが……。』と云つた。

『え、一寸どこへか被來つて頂けると可いんですが……。』と、ギイナはさう言つて、娘を相手に食卓の用意をした。

『奥さん。』と、安樂椅子に腰を下して、寫眞帳を繰つてみたグレエゲルスは、

『貴方は、寫眞の修整をなさるさうですが、結構ですな。』と云つた。

『へ、何でございます。』

『いや、エクダグ君が、寫眞師だからといふことです。』

『お母様は、寫眞もお撮りになれてよ。』と、ヘドキツヒが言つた。

『はあ、では、この御商賣は、實際はあなたがおやりなのですか。』

『え、エクダグの忙しい時にはです。』

『成る程、あの人は、お父様の事ばかり氣にしてゐるのですね。さうでせう。』

『え、それも然うですが、エクダグだつて、この町の方の寫眞を撮るより他に、能のない人間でもございますまいから。』と、ギイナは妙に言葉に綾を持たせ

た。

『さうです。さうですが……。』とグレエゲルスが言ひさした時、家根裏で一發、銃聲が聞えたので、飛び上つて、

『何です、あれは？』と、驚いて聞いた。

『え、又二人が初めたのでせう。獵に行つてゐるのですよ。』と、ギイナが答へた。グレエゲルスは、『何です。』と聞き返したが、家根裏に向つて、

『ヤルマア君。君は獵をして居るんですか。家根裏で。』と言葉を掛けた。すると、

『やあ。』と、ヤルマアは部屋に出て來て、『なに、是れです。』と言ひながら、複銃身の短銃を見せた。

『貴方がたは、今にその短銃で、屹度性我をしますよ。』と、ギイナが言つた。

『チヨッ！ からいふ鐵砲は、短銃と言ふんだつて、教へてあるではないか。』と、ヤルマアは焦れて斯う言つた。グレエゲルスは、

『では、君も銃獵家になつたのだね。ヤルマア君。』
 『なあに。時折、兎を打つ許りさ。親父を喜ばせる爲めに。』
 『男つて變なものね。何かしら、氣を紛す物がなければ、居られないんですか。』とギイナが言つた。

ヤルマアはグレエゲルスに、
 『仕合と、彼處では銃砲を打つても、他へ聞えないのだ。』と云つて、短銃を書棚の一番上へ載せて、ヘドキツヒに、『これに觸つては可けないよ。片方には、未だ弾丸が入つてゐるからね。』と注意した。
 やがて、ギイナとヘドキツヒは勝手へ行つた。

三の三

それから、ヤルマアは幕を上げて、戸を閉めた。
 『こんな仕掛は、皆僕の創意さ。こんな物を拵へたり、繕つたりして居るのも

面白いもんだね。一つには用があるのだ。部屋へ兎や鳥が入つて来るのは、ギイナが喧しいんだ。』
 『それは、然らだらうとも。君の所では、細君が一切、切つて廻して居るやうだね。』
 『うん。小さな事は、皆彼女にやらせるのさ。そこで、僕は寢室へ逃れてゐて、もつと大した事が考へられると言ふものさ。』
 『それは何だい、ヤルマア君。その大した事と言ふのは。』
 『君が、もつと早くにそれを聞いて呉れないのは、訝しいと思ふね。實際、君は未だ發明の事に就いて、何にも聞かないのか。あの山林で。』
 『では、君が何か發明をしたのかい。え。』
 『いや、未だ完成はしないのだ。だが、僕だつて、この町の人間を撮すより他に、何にも爲すに、一生を終る了簡でもないんだ。その位な事は、君だつて察して呉れるだらう。』

『君の細君も、丁度今、そんな事を言はれたが、一體、その發明といふのは、何だね。』

『そんな細かい所まで、訊いて呉れ給ふな。何しろ、時間を要する事だから。僕は、この職業を、藝術で、同時に科學に向上させようと誓つたのだ。そして、この一大發明を爲し遂げようと決心したのだ。僕のこれと思ひ立つた動機が、虚榮の爲めと思はれては困るよ。僕自身の爲めでもない。ねえ、君、晝夜、眼前を立ち去らないものは、僕の生涯の使命なのだ。』

『君の生涯の使命と言ふのは。』

『君は、あの白髮の老人を忘れたのか。』

『なに、君のお父様か。あの人に對して、君は何をするんだね。』

『僕は、エクダル家を再興して、父の自尊心を蘇生させるのだ。難破した人を助けるのさ。言はば、家の親父は、暴風の初めにやられたやうなものだからな。今、吾々が兎を射つてゐるあの短銃も、エクダル一家の悲劇では、一役を勤め

てゐるんだ。禁錮の判決の下つた時、親父はあれを手に取つた。』

『え、お父様が。』

『だが、それを使ひはしなかつた。勇氣がなかつたのだ。それ程、親父は墮落してゐたのさ。それから、親父が鎖で繋がれてゐる間と言ふものは……僕は、家の窓を二つとも閉めて置いた。時々、戸外を覗くと、いつものやうに日が照つて、人が面白さうに喋つてゐる。僕には、皆判らなかつた。世界の運動が、一時止つたやうにも思はれたよ。』と、ヤルマアが、回顧の情に堪へぬやうに云ふと、

『僕も、さう思つた事があるよ。母の死んだ時にね。』

と、グレエゲルスも、泌々として言つた。

『その時、ヤルマア・エクダルは、短銃を胸に當てた。』

『えつ、君もか。——だが、引金は引かなかつたんだね。』

『うん。その刹那に、僕は勝利を感じた。僕は生き残つた。だが、かういふ事由

て生を選ぶのは、勇氣の要ることさ。ねえ、追っけ、僕の發明が完成すれば、レリングの言つたやうに、親父も制服着用を許されるだらうし、僕もたつた一つの報酬として、それを願つて見ようと思ふ。』

『あゝ。お父様が制服のことを、何とか言つたのは、その事なんだね。』と、グレゲルスは、嘗て老人の云つた言葉が、始めて理解された様子であつた。

『うん。親父は、それを一番望んでゐるんだ。君、この家に悦び事があるかね、親父は昔の制服を着てやつて来るんだ。けれど、誰れかが戸口でも訪かうものなら、慌てゝ自分の部屋へ逃げ込むのさ。子として、さう言ふ所を見せられるのは、實際堪らないよ。』

『だが君、それには、家根裏であんな事をして居られたら、時間潰しだし、發明の邪魔にならう。』

『いや、それは君、事實は反對なんだ。時には呼吸を抜かなければならないからね。だが、インスピレーションが来れば、さうすれば、君、もう締めたものだ。』

だ。』

と、ヤルマアの悦ぶのを見て、グレゲルスは、

『ヤルマア君、君は、どうも君の中に鴨の點があるやうだね。海底で確かり藻に嘯り着いてゐるのだ。だが、君は傷を負つてはゐない。が、沼の毒氣に當つてゐる。君の満足してゐるのは、毒氣に當つてゐるのだ。だが、何も心配する事はな、僕が君を助けるから。僕も一つの使命を持つてゐる。丁度、昨日見つけたのだ。』

と、云つたが、その言葉には、深い決心の力が籠つてゐた。

三の四

食卓の支度が出来た時、醫者のレリングと、それからモルキツクが入つて来た。ヤルマアは、二人をグレゲルスに紹介した。レリングは、

『あゝ、エルレエの若旦那、ヘエダルの山の中では、よくお目に掛かりました

な。何時、お移りになりました。え、今朝、さうですか。私とモルキツクは、丁度貴方のお部屋の下に居ります。醫者と僧侶が御用でしたら、ツイ近所で間に合ひます。』と、笑つて言つた。すると、グレエゲルスは、

『あゝ、さうですか。又お願ひするかも知れませんが。昨夜も、十三人食卓に着きましたから。』と云ふと、ヤルマアは顔を擧めて、『又初まつた。よし給へ、そんな話は。』と打ち消した。

『エクダル君。安心なさい。もし運命の指が、君を指してるんなら、代りに僕が首を縊つてやらう。』

と、レリングが言ふのを、ヤルマアはムキになつて、

『僕には、家族があるから御免だ。さあ、諸君、やつて下さい。』と云つた。

『はゝ、時に貴方は、未だ山で、あの厭な仕事にとつ着いて被居るのですか。』と、レリングはグレエゲルスに訊ねた。

『えゝ、今までとつ着いて居たのです。』

『で、何ですか。貴方が持つて廻つてゐたあの要求は、取り立てられるやうになりましたかな。』

『要求?』と、グレエゲルスは考へて、讀めたと云ふやうに、『あゝ、あの事ですか。』

『グレエゲルス君。君は、取り立てなんどして歩いたのか。』

と、ヤルマアが訊いた。その答には、レリングが代つて答へた、

『この方は、職人の小屋を見別に説いて歩かれたのさ。所謂理想の要求と言ふやつをね。』

『えゝ、あの時分は、私も若かつたから。』と、グレエゲルスが言つた。

『左様。貴方はお若かつた。で、その後何うになりましたな、理想の要求は。私が山林にゐた時には、一遍も成功しなかつたやうでしたね。その後、成功しませんでしたか。やれゝ。では、貴方も、少しは割引する位の智慧がつかましたな。えゝ、さうでせう!』と、レリングは半ば嘲笑つて、斯う云つた。すると、

グレエゲルスは、

『いゝや、眞の人間に對しては、そんな事は斷じて爲ません。』と、斷然云ひ放つた。

『さう、それは然うだね。』と、ヤルマアは口を出して置いて、妻に向つて、『ギイナ、牛酪を少し。』と云つた。

その時、家根裏の戸口で音がしたので、ヤルマアは娘に戸を開けさせた。エクダル老人は、生々した兎の皮を手に下げて、『お早う、諸君。今日はこんな佳い獵があつた。』と言つて、向ふの部屋へ入つて行つた。これを見ると、モルキツクは立ち上つて、『失禮ですが——僕は——一寸階下へ。』と言ひ捨てて部屋を出て行つた。レリングはヤルマアに向つて、

『さ、あの銃獵家の爲めに、盃を擧げよう。』と云つた。

『墓の端に立ちながらも、大膽な人の爲めに。』と、ヤルマアは盃を觸れ合せた。

『灰色の頭髮の爲めに。』と云つて、レリングは一口飲んで、『だが、あの頭髮は、白かい、灰色かい。』と云つた。

『さあ、その間だと思ふが。どつちにしろ、澤山は残つて居ないんだ。』

と云つて、ヤルマアが沈み掛けるのを、レリングは、

『なあに、假髮を冠つたつて、世間は渡れるよ。君は幸福者だよ。ねえ、エクダル君。君は高尚な使命を有つてるんだからな。』と、氣を引き立てた。

『あゝ、僕は努力して居るよ。』

『そして、君にはあんな立派な妻君がある。毛氈で拵へた上靴を穿いて歩いてゐる。そして、君の周圍をキチンと片附けるね……。』

『さうだ。ギイナ。お前は好い人生の道連れだ。』

と、ヤルマアが斯う言つた時、ギイナは、『可けませんわ。そんな事を言つちやあ。』と聲を掛けた。レリングは重ねて、

『それに、ヤルマア君、未だヘドキツヒさんがゐる。そして、驚くべき大發明

がある。ねえ、どうです。』と、グレエゲルスの方へ向いて、『貴方も、かういふ楽しい家庭で、行き届いた御馳走に呼ばれるのは、愉快だとは思ひませんか。』と云つた。

『僕は、ほんとに斯ういふ風な交際が嬉しいね。』と、ヤルマアが言つた。グレエゲルスは考へてゐたが、

『僕は、毒氣の中で榮え度くない。』と、力無氣に云つた。

『毒氣です。』と、レリングは聞き咎めた。

『エルレエさん。妾、毎日風通しを好くして置きますから、此處には、そんなものは少しだつてありはしませんのよ。』とギイナが言つた。

『風通しを好くした位の事では。』と、グレエゲルスは食卓を離れて、『僕のいふ毒氣は脱けません。』と云つた。

『なに、毒氣だ。』と、ヤルマアが頗る不機嫌でかう言つた時、妻のギイナは良人に向つて、

『ねえ、貴方、あんな事を言はれて、黙つて居るんですか。』と腹立たし氣。

『失禮ですが、山坑から毒氣を持って來られたのは、貴方自身ではないか。』

といふレリングの顔を見て、グレエゲルスは、

『僕が、此處へ持つて來たものを、毒氣だなんて言ふのは、君らしい言草だ。』と云ひ放つた。

『エルレエの若旦那。』と、醫者は相手の傍へ寄つて、『有體に申し上げよう。僕は、その上衣の後の衣兜に、君があゝの理想の要求を持つて居やしないかと思つてゐる。』と、皮肉つた。すると、グレエゲルスは、

『僕は、それをこの胸に持つてゐる。』と、冷かに云つた。

『へん！ 何處にでもせよ。此の家にゐる間は、あまり喧しく責り散らさないやうにし給へ。それだけは忠告する。』

『で、もし僕が、それをすると言つたら。』と、グレエゲルスは問ひ返した。『階段から突き落すまでだ。判りましたかな。』

『レリング君、まあ。』と言つて、ヤルマアは立ち上つた。
 『では、突き落して貰はうか。』
 と、グレエゲルスが言つた時、ギイナは慌て、二人の中へ割つて入り、
 『レリングさん、そんな事をなすつては可けません。エルレエさん、貴方も。
 御自分では、暖爐であんな事をなさりながら、毒氣だの何のつて、お言葉が過
 ぎはしませんか。』と止めた時、誰れだか入口の扉を敲く音がした。

三の五

『お母様。誰れか來ましたよ。』と、ヘドキツヒが聞きつけて斯う云つた。ギイ
 ナは入口へ行つて、扉を開けて見て驚いた。其處には、グレエゲルスの父のホ
 オコン・エルレエが立つてゐた。

『御免なさい。此方へ忤が參つては居りませんか。一寸、忤に用があつて伺つ
 たのですが。』と、云つて、エルレエはグレエゲルスを見つけて、『あゝ、お前の部

屋まで行かう。でなければ廊下でも可い。』と、息子の傍へ寄つて云つた。ヤル
 マアは、

『では、此處でお話なさいませんか。』と云つて、更に、『レリング君、寢室の方
 へ來給へ。』と、此席を外さうとした。そして、醫者とヤルマアは寢室へ、女二
 人は勝手へ立つて行つた。

やゝ暫く父子は差し向ひになつて、黙つてゐたが、やがて父のエルレエは、
 『ねえ、グレエゲルス、昨夜のお前の口吻と言ひ、かうやつてエクダルの所に
 落着いてゐるのを見ても、お前は、何か私に逆らふ意でゐるのだらう。』と言つ
 た。

『私は、ヤルマア・エクダルの眼を開けてやらうと思ひます。』

『はゝあ、それが、お前の人生に於ける使命なんだね。』

『えい、貴方は、私に何も残しては下さらなかつたのみか、貴方は、私の一生
 を不具になすつた。私が、始終疚しい思ひをするのも、皆貴方の爲めです。私

はエクダル中尉の爲めに、陥穽が掛けられた時から、貴方に反抗しなきやならなかつたのです。あれが判つた時、あの人に警告してやらなければならなかつたのです。』

『さう——するのなら、あの時だつたね。』

『え、然し、當時の私には、出来ませんでした。卑怯者だつたのです。その後までも、死ぬほど貴方を恐れてゐた。然し、今は、その恐怖に勝つことが出来ました。だが、最早エクダル老人は、取り返しが付きません。その代り、ヤルマアは、私が助けてお目に掛けます。』

『で、お前は、あの男に親切にしてやるのか。だが、あの寫眞師が、そんな親切を嬉しがる男だと思ふかい。』

『さうです。私は、この先生きて行くには、この疚しい良心を癒す法を見つけて、試して行かなければなりませんからな。』

『そいつは冗だ。お前の良心は、幼少い時から病氣なのだ。それが、お前の母

の遺産なのだ。』

『貴方御自身の眼ちがひから、お母様の財産を手に入れ損なつたと言つて、大層お腹立のやうでしたつね。』と云つて、グレエゲルスは冷やかに笑つた。

『濟んだ事は、どうでも可い。お前は、エクダルを、お前が正しいと信じた途へ引き出さうと言ふんだね。では、私は來なくつても可かつたのだ。無論、一緒に歸つて呉れと言つても、冗だらう。會社へも入らない意だらうね。』と、父が念を押すと、

『え、入りません。』と云ひ放つた。

『それも好からう。私は、再婚しようと思ふから、財産の幾分は、お前に分けて遣れる。』

『いえ、そんなものは要りません。僕の良心が欲しません。』と、グレエゲルスは慌て、斯う言つた。父のズルレエは、暫く黙つてゐたが、

『お前、又仕事場へおいでか。』と訊いた。

『いえ、もう貴方に使はれる事は御免蒙りました。私は、只使命を果すのです。』
 『だが、その後は、何をして暮らす意かね。』
 『え、月給の中から、少し宛貯金して置きましたから。』
 『でも、それが何時まで続くといふ譯でもなからう。』
 『私が、死ぬまでは續きませう。』
 『何、何だつて。』

『いえ、もう申し上げる事はありません。』

『では、左様なら。』

『左様なら。』

斯うして、父のエルレエが出て行くと、ヤルマアは顔を出して、『お父様は歸られたね。』と言つた。

『ヤルマア君。君、上着を着て、一寸僕と一緒に散歩しないか。いろ／＼話もあるから。僕も上着を着て来よう。』と云つた。

グレエゲルスが戸口を出て行つた後で、ギイナは何となく氣掛りな事がある様子で、良人に、

『貴方、被行らない方が可ござんすよ。』と止めた。

『うん。君、行かないが可いよ。家に居給ひよ。』と、レリングも言つた。

ヤルマアは、帽子と上着を取つて、『莫迦な。子供の時からの友達が、何か秘密話があると言ふのに――。』と打ち消した。

『何を言つてるんだ。君は、あの狂氣染みた様子が見えないのかい。』

と、レリングは重ねて言つた。ギイナもその尾について、

『あの方のお母様も、時々氣が變になつた事がありましたよ。貴力、御存じですか。』と云ふと、良人のヤルマアは、

『では猶更、友達の監督を要する譯だね。おい、ギイナ、晝飯の仕度を頼むよ。レリング君。一寸失敬。』と云つて出て行つた。

ヤルマアが出掛けた後で、ギイナとレリングは、顔を見合はせた。醫者は咳

をして、

『あんな野郎は、ヘエダルの山の中で、坑へでも落ちて死んぢまへば可いんだ。』

と言つた。ギイナは眉を擡めて、

『ほんとに、エルレエさんは狂人でせうかね。』と訊いた。

『いや、そんなに違つてもありませんがね、たゞ病氣なんですよ。』

『何病です。』

『左様。何と言つたもんですかな。急性廉潔症とても言ひますかね。奥さん。』

これは國民的疾患です。尤も、突發的に現はれる丈ですがな。や、どうも御馳

走様。』

と云つて、醫者が會釋をして出て行くと、ギイナは太息を吐いて、

『グレエゲルス・エルレエと言ふ人は、先から恐ない人だつた。』と獨語のやう

に云つた。

四のー

ヤルマアが歸つて來たのは、晝飯の支度も冷切つて了つた夕近くの事であつた。急いで、外套を脱ぐ手傳ひをしようと飛んで來た妻と娘を、手眞似て去らせた。ギイナは傍へ寄つて、

『晝飯は、エルレエさんと御一緒でしたか、未だなら、何か持つて來ませうか。』

『いや、この儘にして置いて呉れ。何にも喰べ度くないから。』

『マアお父様。何處かお悪いの』と、娘のヘドキツヒは心配さうに訊いた。

『うん。グレエゲルスと一緒に歩き廻つたものだから、草臥れたんだ。』

『そんなに、お歩きなさらなければ可いのに。貴方は遠道に馴れておゐてなさらないのですもの。』

と、ギイナが言つた。ヤルマアは、部屋をうろく歩きながら、

『だが、男は馴れて置かなければならないものが澤山あるんだ。時に、私の留

守に、誰れか来たか。新らしい注文でもあつたか。』と聞くと、妻は、

『誰れも。そして、今日は注文はありませんでした。』と答へた。

『お父様、明日は屹度ありますよ。』と、娘のヘドキツヒは、優しくも斯う云つて父を慰めた。

『さうだと可いね。私も、明日からは大いに働く意だから。』

『明日からって。明日は、何の日だと思つて被居るの。』

ヤルマアは、この言葉に、娘の誕生日だつた事を思ひ出して、『あゝ、さうだつたね。では、明後日からしよう。向後何でも自分でするのだ。』と、意味あり氣に云つた。

『貴方、そんな事をしてどうします。寫眞の方の事は、妾で出来ますから、それよりか、發明の方に掛かつて下さいな。』

と、ギイナが言つた。ヘドキツヒも口を添へて、

『鴨の事もあるぢやありませんか。ね、お父様。牝鶏だの兎だの。』

『そんな詰らない事を言つてお呉れでない。明日から、もう家根裏へは足も踏み入れない。』

『まあ、お父様。明日、彼處でお祝ひするつて言つたぢやありませんか。』

『さうか。では、明後日からでも可い。チョツ！ あの糞忌々しい鴨の首を捻ぢ切つてやり度いくらゐだ。』と、ヤルマアは、何事か胸裡の憤怒に堪へぬ様子である。

『鴨を。』と、娘は驚愕して、『お父様。あれは妾のですよう。』と、半べそをかき出した。

『うん／＼。だから、何も爲やしないよ。ヘドキツヒ、私はお前の爲めに勇氣が出ないんだ。だが、私はさう思つてゐる。この家根の下には、一度彼奴のだつたものは、置いてやる事はならないんだ。』と、良人は頻りに妙な事を云つた。

『何だつて、そんな事を被仰るのです。』

と、妻のギイナは心配さうに訊いた。ヤルマアは娘の氣の向かないのに、強

ひて散歩に出して遣つた。そして、後に、下俯いて部屋の中を歩き廻りながら、妻に向つて、

『ギイナ。私は明日から、でなけりやあ明後日からでも、家の會計を自分でやらうと思ふ。兎に角、収入だけでも、附けて見ようと思ふんだ。お前はあの位の金で、かなり長い間やつて行くね。どうすれば、そんな事が出来るい？』

斯う云つて、立ち止まつて、良人は妻の顔をヂツと見た。

『え、妻やヘッドキツヒは、僅少あればいけるのです。』

『お父様は、エルレエさんの所の寫し物で、好い報酬を貰つてゐるさうだが、一體どの位貰つてゐるのかね。え、！』

『そんなに、好い報酬だか、どうか判りませんが、…それに何日も同一ではないんでせう。何でも、あの人の生活費を引いて、お小遣がぼつちり残る位でせうよ。』

『あの人の生活費を引いて。…おい、ギイナ、お前は一遍もそんな事を私に

言はなかつたではないか。で、それを皆エルレエさんが出すんだね。』

『え、あの人はお金持ですから。』

『おいッ！ 洋燈をお點け。』と、良人のヤルマアの聲には力があつた。

ギイナは、洋燈を點しながら、『それも、エルレエさんの手許から出るのか、クロウベルグさんの計らひだか、判りますまい。妾、知らないんですけど、さう思ひますよ。』と平氣を裝つて云つた。良人は焦れつたさうに、

『何だつて、そんなに糊塗すのだ。』と、突つ込んだ。

『だつて、お祖父様のお仕事の世話をしたのは、妾ではありません。あのベルタさん、——ゼルビイさんですよ。あの女が、よく家へ來てゐた時分に…』と、妻の聲は、良亂れかゝつた。

『お前の聲は、慄へてゐるね。』と、更に良人は突つ込んだ。

『さうですか。』と言ひながら、ギイナは洋燈に笠を掛けた。ヤルマアは、その手を見て、

『そして、手も慄へてゐる。え、どうしたんだい。』と、遂に良人は一聲怒鳴つた。

ギイナは屹として、

『貴方、瞭然被仰つて下さい。あの人は、妾の事を何て言ひました。』と、最前良人を引張り出したグレエゲルスが、良人に何か告げ口した事を知つたので、夫れを聞き出さうとして斯う云つた。

四の二

やがて良人のヤルマアは、妻の顔を見ながら、短刀直入に、斯う切り出した。『眞實なかい、あれは。あの、お前が奉公してゐた時、エルレエさんと何だつたと言ふのは。』

『そんな事はありません。え、あの時には、エルレエさんが妾の後を追ひ掛けた事は眞實です。それは眞實なんです。そして死つた奥様が、それを勘違ひし

て、妾を追ひ廻したりなさるので、妾もお暇を頂いたのです。』

『で、それから。』

『え、それから家へ下りましたが、あのお母さんと言ふ人ね。あれも貴方が思つて被居るやうな人ではありません。妾にしち煩く勧め立てたものです。尤も、あの時分、エルレエさんは獨身でしたから。』と、妻のギイナが云ふと、

『そ、それから。』と、良人はその後を早く聞かうと、ひと膝乗り出した。

『寧ろもうすつかり言つて了つた方が可ござんすね。あの人はね、一旦かうと思ひ込んだからには、思ひを遂げずには置かない人です。』

ギイナは聲に決心の意をこめて言ひ放つた。ヤルマアは威猛高に、

『こゝ、これが子供の母か。これが。：お前は何故それを隠してゐた。』

『え、妾が悪うござんした。もつと早く言はなければならぬのでした。けれど、さう言つたら、貴方は妾と一緒になつて呉れましたらうか。』

『何だつて、そんな事を言ふんだ。』

『ですから、妾は何にも言はなかつたのです。妾、それ程貴方を想つてゐたのです。貴方に別れては、妾——』

『こゝ、これがヘドキツヒの母親か。今まで自分の家だと思つてゐたのは。皆先に愛して居た男からの借物なんだ。エルレエの畜生！』

と、ヤルマアは堪へ切れぬ様子で、部屋の中を歩き廻つてゐたが、やがて椅子をひとつ蹴つた。ギイナはその後から心配さうに、

『では、貴方は、妾と一緒に暮らした、此の十五年間を悔いるのですか。』

『お前は、お前は、後悔しないのか。日夜、別に後悔もしなかつたのかえ。』

『だつて貴方、妾には家の事や何かで、他に氣を使ふことが澤山ありますからね。そんな古い事なんか、大概は忘れてしまひました。』

『あゝ、そんな無感覺な満足なんか。何だ。それまで、もう厭な心持ちだ。考へて見るが可い。一遍も後悔しないなんて。』と良人は頗る不愉快さうに云つた。

『けれど貴方、もし妾のやうな女房がなかつたら、どうなさいます。御承知で

せうが、妾は貴方よりは少し許り實際的で、眼も見えます。それは年齢も一つか二つ上ですけど。』とおろ／＼しながら辯解じみた事を云つた。

『で、お前のやうな者が来なければ、私はどうなつて居ると言ふのだ。』

『初めてお目に掛かつた時には、かなり善くない事を知つておいででした。ねえ。それから家が出来たと云ふものは、貴方はほんとに好い御主人になつて下さいました。今では、何らか斯うかやつて行けて、もう少ししたら樂になるだらうと、ヘドキツヒと二人で喜んでゐたんですの。ほんとに、あん畜生、闕も跨がせないから。』と、ギイナは、良人にこの秘密を打ち明けたクレエゲルスに就いて憤つた。

『ギイナや、私もどの位嬉しがつてゐたか知れない。それが皆夢なんだ。もうからなつては、何を樂しみに發明を續けて行かう。もう駄目だ。發明も私と一緒に死んでしまふ。ギイナ。それを殺したのは誰れでもない。お前の過去だ。過去の罪惡なんだ。』

『あゝ、もう萬望、そんな事は言はないで下さい。妾はたゞ貴方の爲め計り考へて居たのです。』

『あゝ、みんな夢だつた。皆お終ひだ。』と、ヤルマアが言つた時、グレエゲルスが戸を細目に開けて、『入つても可ござんすか。』と訊いた。ヤルマアが、『お入んなさい。』と言つたので、グレエゲルスは得々として入つて来て、

『さて、お二人！』と言つたが、二人共變な顔をしてゐるので、『君、未だかい。』と低聲で訊ねた。

ヤルマアは大きな聲で、『濟んだ。僕も一生中での最も苦い瞬間を経験した。』と云ふと、グレエゲルスはその後について、

『同時に、最も向上的なものと、僕は思ふが。』と附け加へた。

『エルレエさん。貴方は酷い事をなさいますのねえ。』

と、ギイナは恨めしさに言つた。グレエゲルスは駭いて、

『これは訝しい。あの位大きな、すべての虚偽を離れた眞理の上に建てられる

共同生活の出發點たるべき危機のあとで：：僕は君達御夫婦が、生れ變つたやうな光景に駭かされるだらうと思つてゐた。奥さんは兎に角、ヤルマア君、君は清々するだらう。過失を犯した者を宥して、自分と同列に、愛の力で引き上げる位、愉快な事はなからう。』と云ふと、ヤルマアは、

『うん。だが、君は人が飲干した苦い盃の効めを、さう早く忘れられると思つてゐるかい。何しろ、時日を要する事だから。』と、力のない言葉で云つた。

すると、グレエゲルスは、

『ヤルマア君。君は、自分の中に大分鴨の所があるね。』と云つた。

四の三

『又鴨の話ですか。』と言つて、この時、リングが入つて來た。そして、グレエゲルスの傍へ寄つて、『君は取り返しつかない事をしたね。』と言つた。ヤルマアはそれを見て、咎めると、醫者は落着いて、

「なに、私はね、此の庸醫が手を引いて呉れば可いと心から思ふのさ。でないと、君達二人は滅茶苦茶になつて了ふから。」と云つた。すると、

「レリング君。この人達はさうはなりませんよ。」とグレエゲルスが言つた。

「レリング君。この人達はさうはなりませんよ。」とグレエゲルスが言つた。醫師は相手を見て、『失禮な申し分だが、貴方は一體此處で何をなさらうといふのです。』と訊いた。

「眞箇の結婚の基礎を固めようと言ふのです。」とグレエゲルスが答へた。

「で、貴方は今までは、眞箇の結婚といふものをどの位見ました。」

「一度もないのです。」とグレエゲルスが答へた。

「私もさうだ。」と醫師が言つた。

「けれども、それと反対なものは澤山見ました。さういふ結婚が、どんな悪い結果を生むといふ事を、眼前見せられてゐるのです。」とグレエゲルスが云ふと、

「成程ね。」と、レリングは一寸考へて、『僕は眞箇に結婚しないから、かういふ問題に携はる資格はないかも知れないが、只この事だけは知つてゐるんだ。結婚

の問題には、子供が附いて来る。ねえ、子供だけは、ツツとして置かなければ可かん。即ち、ヘドキツヒさん丈は、問題外にし給へよ。君達二人は大人だから、何をするのも好いが、子供の事は、念にも念を入れてやり給へ。でないと、飛んだ事になるよ。自分で自分の身に害を加へるやうな事があるかも知れない。」と云つた。

「あの子の眼が、そんなに早く、どうかになると言ふのではなからうね。え。」

と、ヤルマアは心配さうに斯う訊いた。醫師レリングは、その顔を見て、

「僕は眼の事を言つて居るんではないさ。ヘドキツヒさんは、危険な年齢だからね。身體の組織が變り掛けてゐるんだ。」と言つてゐる所へ、戸を敲く音がして、ゼルビイ夫人が入つて來た。彼女は散歩服を着てゐた。そして、『今頃上れば、殿方は皆お出掛だと思つたからです。』と言つた。それから彼女は、ヘエダルの山林へ出發した。グレエゲルスの後を追つて行くのだと話した。其處で二人は結婚するのである。グレエゲルスを除くの外、ギイナもヤルマアも意外に思つ

た。最も意外に思つたのは、醫者のレリングだつた。彼は聲を慄はせながら初めて口を開いた。

『それは、本當らしくないね。え、貴女は又結婚するのかね。』

『え、わたし達は山林へ行つて、靜かに結婚する意なんですの。』

『それは結構だ。僕の知つてゐる範圍では、ヱルレエさんは酒も飲まず、又先の御亭主だつた獸醫のやうに、細君を撲る人とも思はれないから。』

『ゼルビー(先夫の姓)の事を、そんなに被仰らないで下さい。あれは又あれで、好い點がありました。』

『だけど、ヱルレエさんの方が、もつと好い點があると思ふね。うん、今夜はモルキツクと出掛けてやらう。』と、レリングはかう言つたが、ヤルマアに向つて、

『君も来るなら、一緒に來給へな。』と誘つた。

『否、難有。ヤルマアは、そんな散財には御一緒に參れませんから。』

とギイナの言ふのを、『黙つてろ。』と、ヤルマアは怒鳴り付けた。レリングは

ゼルビー夫人に、『では、ヱルレエの奥さん。左様なら。』と言つて出て行つた。

グレエゲルスは、黙つて始終の様子を見て居たが、ゼルビー夫人に、

『貴女は、大分あのレリング君と、御親密のやうですが、私があつたお馴染の事を、親父に言ひはしまいかと思つて、少しは心配でせう。』

『いゝえ。妾、その事なら、もう悉皆お父様にお話がしてありますから。それが妾のやり方なのです。少しも隠し立をしないと云ふのが。それにお氣の毒な事には、あの方は最早』

と言ひ掛けるのを、グレエゲルスが遮つて、

『それを言つては可けません。』と留めた。

『でも、もう直き判る事ですもの。あの人はね、盲になるんです。』

『えッ、盲に、あの人も。』とヤルマアは訝んだ。

『世間にはいくらもありませぬ。』とギイナは打ち消すやうに言つた。

ゼルビー夫人が、この家の様子の何となく變なのを見て取つて、歸つた後で、

ヤルマアは、隠し立てをしないゼルレエとゼルビイ夫人との間を羨んだが、直ぐにかう言つた。

『この世には神はないんだ。ねえ、僕も運命の支配を認めない譯には行かないんだ。あの人は盲になる。ねえ、そこに因果應報といふものがあるんだ。あの人は、先に一人の無辜の同胞を盲にした。そこで、今や遁れ難い天命が自分に廻つて来て、盲にならうとしてゐる。先に一人の無辜の同胞を盲にした罰です。』

『悲しい事には、それが一人だけではないんだ。』と、グレエゲルスが言つた。

『まあ厭だ。何だつて、そんな氣味の悪い事を。』

と、ギイナは慄へ上つて斯う云つた時、ヤルマアは聲に力をこめて、

『人生の暗い方面を覗くのも、時には冗てはないよ。』と言つた。

そこへ、ヘドキツヒが歸つて来た。手にはゼルビイ夫人から貰つた手紙を持つてゐた。その中には、ゼルレエからの送金の證書が入つてゐた。ヤルマアは、

『親父を撰ぶか、自分を擇るか。』と、グレエゲルスに迫られて、ジリ／＼とその證書を二つに裂いた。グレエゲルスはそれを見て満足した。けれども、ヤルマアはヘドキツヒの顔に眼を移して、其眼の悪い様子を見ると、堪へ切れなくなつて飛び出した。ギイナはその後を追掛けて見に行つたが、レリングやモルキツクと、一緒に出て、何處へ行つたか判らない。グレエゲルスはヘドキツヒに、その好きな鴨を、娘の一等大切なものを、父親の爲めに犠牲にしてはどうだと智慧をつけた。

五のー

その翌日、厚ぼつたい雪が積つてゐる撮影場の傾斜した硝子窓に、灰色の薄い朝日が落ちる時分から、ギイナは起き出で、部屋の掃除や何か忙しがつてゐた。そこへ、グレエゲルスが、ヤルマアの行先を訪ねに来た。

『昨夜の中に歸つて来て、レリングさんの部屋に居るさうですよ。』とギイナが

答へた。

『レリングの部屋に。あんな人達と一緒に歩いて居たのですか。あの男は、あくまで孤獨に堪へ忍んで、自己の問題を眞摯に考へて見なければならぬ時だのに。』と、グレエゲルスがもどかしがるのに、ギイナも同意して、

『ほんとは、被仰る通りなのにねえ。』と言つた。

その時、戸口からレリングが顔を出した。ギイナはそれを見つけて、

『貴方の所にあるのですか。』

『え、居ますよ。』と醫者が答へた。『私も泥酔者なら、彼奴も泥酔者さ。おまけに、私は彼奴の面倒を見てやらなきやあならなかつたもんだから。あのモルキツクの悪魔野郎の事ですぜ。その中に、私も疲れが出たと見えて、グツスリ眠ちまつて——。』

『エクダル君は、何か言ひましたか。』と、グレエゲルスが訊いた。

『いゝえ。何にも言ひませんよ。一語も。』

『うん。それは言ひますまい。僕には判つてゐる。』

『何をして居りますの。』とギイナが訊ねた。

『長椅子へ、引轉り返つて寝てゐますよ。大鼾聲でね。』

と、醫者が答へた。ギイナは頷いて、

『さうですか。ほんとに大きな鼾聲をかく人ですね。』

『あれだけの心の苦闘に疲れたんだから。』と、グレエゲルスが言つた。

『え、夜中戸外をほつつき歩くことには馴れてませんかねえ。』とギイナが言つた。『どうも難有うござんした。レリングさん。一寸失禮。部屋の掃除をして來ますから。』と云つて、彼女は娘を連れて、居間の方へ行つた。グレエゲルスは後を見送つてゐたが、醫者に向つて、

『エクダル君の頭腦に起りつゝある精神の騒亂を、君はどうお思ひです。』

『あの男には、精神の騒亂なんでもものは、有りさうには思はれませんか。』

『何。この大切な場合に。あの男に生涯が新らしい基礎の上に建てられようと

いふ場合に、どうして、君はそんな事を言ふのです。ヤルマアほどの個人性を有つた男が——』

『え、何です。個人性ですつて、あの男が。マア個人性といふやうな不規則な發達をする傾向があつたとしてもです。そんなものは疾うに十代の時に悉皆なくして居ますよ。』

『さうだとすれば、變てすな。あれ丈、大事に掛けて育てられた教育から見てもね。』

『あの、何ですか。變物の老嬢の伯母さん達に育てられたと言ふんですか。』

『え、あの伯母さん達二人は、理想の要求を忘れなかつた女です。——あ、君は又串戯化てるんでせう。』

『いや、どう致して。僕も、あの人達の事は知つて居ますよ。ヤルマアからね、あの男一流の形容澤山な文句でもつて、「二人の魂の母」に就いて、よく聞かされたもんでさあ。だが、何もヤルマアがあの人達に禮をいふ譯はありま

すまい。あの男の不幸なのは、いつも周囲から、明星のやうに仰がれてゐたと思ふからなんです。』

『それにした所で、満更譯のない事ではないでせう。あの男の心の深みを見給へ。』

『僕は、不幸にして、さういふものを一遍も見たことはありません。あの男のお父様が、さう信じてゐるのは奇異はない。あの中尉は、前から薄のろてすから。』

『いゝえ。あの男はね、前から子供のやうな心でゐるのです。だが、それが君には判らないのさ。』

『ぢやあ、マア、さうとして置け。』レリングは鼻であしらつて、『然し、好漢ヤルマアが大學に入ると直ぐ、學生間では將來有望と見做された。先生、ちよつと綺麗だもんだから、町の女子供が大騒ぎをやる。あの感動され易い氣質と、同情を引く聲でね。他人の歌を唱はせたり、他人の思想で演説でもさせて見度

い。』と云ふと、グレエゲルスは憤然として、

『そんな風に言ふのは、それはヤルマア・エクダルの事ですか。』

『お氣に觸つたら御免なさいだが、貴方がその前に跪いてゐる偶像の本體は、マアこんな物だと言ふのです。』と、レリングは冷やかに斯う云つた。

五の二

レリングの言葉に、グレエゲルスは昂然として、

『僕だつて、そんな盲目ぢやあないと思つて居ます。』と、不愉快さうに云つた。

『さうでせうとも。貴方も病人ですからな。』

『それは然うです。』

『しかも、一層手が込んでゐると來てゐる。先づ第一に、貴方には廉潔熱と言ふ、容易に退かない熱がある。そして、それよりも困ることには、貴方はいつも英雄崇拜に熱狂してゐる。自分以外に、何か崇拜するものがなきや納らな

いといふんだから。』

『さうです。僕はそれを、自分以外に求めなければならぬのです。』

『ですがね、貴方が新しい靈鳥を見つけたと思ふ度毎に、こんな變な間違ひをやつてるのでさあ。貴方は又、理想の要求を責りに來ても、此處では、誰れも拂へませんよ。』

『君は、ヤルマア・エクダルを、それより上の人間と思つて居ないのならば、何故またそんな人間と、いつも交誼つて居られるのです。』

『僕は、これでも醫者ですからね。同一家に病人があれば、手を貸さずには居られませんやね。』

『なんですか。では、エクダルも病人だと言ふのですか。』

『え、大概の人は皆病人ですよ。』

『で、君は、ヤルマアの病氣には、どんな治療法を講じて居るのです。』

『私のいつでもやる事です。あの男に、人生の嘘を教へてやつたですよ。御

承知の通り、この嘘といふ奴は、よく効く薬ですからね。』
 『で、ヤルマアは、どんな嘘を注射されてゐるのですか。念の爲めに何つて置き度いですが。』

『それは可けません。職務上の秘密ですからね。貴方は又搔き廻して、前よりもつと悪くするからね。だが、この治療法は誤りなし。ね、僕は嘗てモルキツクにも用ゐてゐるのです。彼奴を「悪魔」にしたのです。それがあの男の頭に貼られた発泡膏なんです。』

『では、あの人は悪魔ぢやあないんですか。』

『はゝゝ。悪魔つて魔は、どんなものです。それはね、あの男の生命を、少しでも伸してやらうと思つて、私が考へ出した無茶苦茶でさあ。ねえ、そんな事でもしなければ、あの可憐なお人好しは、自分と言ふものに愛想を盡かして、疾のむかしにへた張つて居ますのさ。それから、あの中尉ですがな、あの人はよく自分の治療法を見つけたもんですよ。』

『エグダル中尉が、どうしたと言ふのですか。』

『ようござるか。一時は熊狩をして、熊を九頭も射つたといふ老人がですね、あんな薄つ暗い家根裏に入り込んで、兎を追掛けて居るんですよ。ねえ、あの人よりも幸福な銃獵家は、世間にもありやあしませんぞ。あの獲物の中で、ヨボヨボしてゐる老人よりもです。耶蘇降誕祭の木の枯れたのが四五本ありやあ、それがあの人にはヘエダルの森林でさあ。鶏は樞の木末の大きな獲物で、家根裏を跳ね廻る兎は、山の大銃獵家の手腕を奮はなければならぬ熊なんです。』
 『實際、氣の毒な老人なんです。若い時の理想を狭くしなければならぬのですから。』

『えゝ、エルレエの若旦那。このお話の中は、「理想」なんて外國語は、マキにして頂きませう。「嘘」といふ立派な自國語がありますからな。』

グレエゲルスは、相手のレリングの顔を見て、

『では、君はこの二つの語が同じものだと言ふんですね。』

『え、窒扶斯にマラリアと言つた位、近いものでせう。』

『レリングさん。』とグレゲルスは屹として、『僕はヤルマア君を、君の手から助け出すまでは閉口しませんから。』

『そんな事をなさりやあ、餘計悪くする許りでさあ。』と醫者は落着いて、『普通の人間から、人生の嘘を剥ぎ奪れば、それが幸福を剥ぎ奪ることになるんですからね。』と言つた時、ヘドキツヒが居間の方から出て來たので、

『いよう、鴨のお母ちゃん。僕はね、お父様が寝ながら、あの驚くべき發明の考に耽つてゐるか、一方行つて見て來ます。』と言つて、レリングは廊下へ出た。

五の三

後に、グレゲルスは娘の傍へ寄つて、もう一度、自己を犠牲にする精神の必要なことを説いて、鴨を殺すやうに勸めて、さて、室外に出た。ヘドキツヒは考へながら、勝手の方へ行かうとした時、家根裏の戸がトク、と鳴つた。そ

こで、其の戸を開けると、エクダル老人が寒さうな風で、『一人ぢやあ散歩も面白くない。』と言ひながら入つて來た。

『銃獵は、お祖父様、もうなさらないの。』と、ヘドキツヒが訊いた。

『うん。今日はそんな天気ではない。暗くつて先が見えやしない。』

『お祖父様は、兎より外に、何にもお射ちなさらないの。』

『兎だけでは、足りないと言ふのかい。』

『え、けれど鴨は。』

『は、お前のを射つかと思つて、心配してゐるのか。なんの。どうして。』

『え、え、お祖父様には射てないでせう。鴨を射つのは、むづかしいんですつてね。』

『射てないつて。いや、射てるとも。』

『では、どういふ風にして射つ。妾の鴨のことぢやあないんです。餘所の鴨のことよ。』

「私は先づ胸を狙ふ。これが一等大丈夫だからな。それから羽がひだ。が、ほんたうに羽根を射つのではない。さうすれば死ぬよ。狙ひが外れなければね。時に顔を洗つて来ようか。」と言ひ捨て、老人は居間へ歸つた。ヘドキツヒは四邊を見ながら、本箱の近くへ行つて、爪立つて、上の棚から二連發の短銃を取り下して見てゐた。そこへギイナが箒と采配とを持って這入つて来た。ヘドキツヒは喫驚して、舊の所へ短銃を返して、素知らぬ顔をした。

「ヘドキツヒ、そんな所で、お父様のものをいぢつては可けませんよ。」

ギイナは娘を勝手へ追ひやつて、部屋の掃除を初めた。ところへ、ヤルマアが歸つて来た。彼は外套こそ着てゐるが、帽子もなく、顔も洗はないらしく、亂れた頭髮には、櫛の齒も入つて居ない。眼はドンヨリとしてゐる。ギイナは箒を手にして立つた儘、その姿を見て、

「あゝ、貴方。お歸んなさいまし。」

「一寸歸つて来た。だが、又直ぐ行くよ。」

「さうだらうと思ひました。けども、マア貴方、その御様子は。」と、ギイナは眼を見張つた。娘は父の姿を見て駈けて来た。そして縫りつきながら、

「お父様。お父様。」と言つたが、ヤルマアはあらぬ方に向いて素氣なく、

「彼方へ行つてゐる。おい、おい、この子を連れて行け。」

「ヘドキツヒ、お部屋へ行つて被居い。」

ギイナは低い聲で言つた。娘は情なきさうに出て行つた。ヤルマアはガタピシ言はせて、机の抽斗を開けながら、

「書物を持つて行くのだが、何處にある？」と訊いた。

「貴方は、まだ妾達を捨て、被來るお意なんですのね。」

「さうさ。」と、書物の中を引掻き廻しながら、「知れた事だ。始終辛い思ひをして、こんな所に居られるものか。」

「けれど、貴方、お祖父様をどうなさるの。」

「自分の爲べき事は心得てゐるよ。お父様は連れて行くのだ。私は、町で開業

する意なんだ。あゝ、あの、階子段の所で、誰れか私の帽子を拾やしないか。』

『いゝえ……帽子を落したんですか。』

『うん。昨夜歸つて來た時には、冠つてゐたんだ。確かに冠つてゐたんだが、今朝になつて見えないんだ。』

『マア、何て事です。あんな人達と一緒になつて。』

『つまらない事を言ふな。そんな事を覺えて居られる氣持だと思ふのか。』

『いえ、お風邪でも引かなければ可いと思つて言ふんですよ。』

ギイナはさう言つて、勝手へ下つた。ヤルマアは抽斗のものを卓上にぶちまけて、

『畜生。レリングの奴め。恥知らず。人を連れ出して……。チョツ、誰れかに突き殺さして呉れ度い。』と言ひながら、古い手紙を束ねた。そして昨日破つた、あの證書を見つけて、それを手に持つてぢつと見てゐたが、ギイナが來たので、慌てて机の上に置いた。

『温いものを持つて來ましたよ。上るかと思つて。麵麩に牛酪に、鹹肉が少し。』

ギイナはかう言つて、珈琲や何かの載つてゐる盆を、卓子の上に置いた。ヤルマアはひと目見やつて、

『なに、鹹肉。いゝや、この家では、何にも食ふまいよ。私は殆んど二十四時間、固まつたものはひと口もやらなかつた。が、そんな事はどうでも可い。だが、私の備忘録はどうした、自傳の端緒は。日記や何かの大切な書き物はどうした。』

と言つて、居間の戸を開けると、ヘドキツヒが見えたので、一歩下つて、

『又彼處に居る。』と言つた。

『可憐想に。あの娘だつて、何處かに居なければ仕様がないうちやありませんか。』

と、辯解するギイナに向つて、

『私も、この家庭には、もうあと唯た二三十分しか居ないんだから、その間だけ

でも、邪魔者には入られ度くないね。」と云ふと、ヘドキツヒは之れを聞いて、「妾の事でせうか。」と、母の傍へ駆け寄つて来て、慄へながら訊いた。「いいから、彼方へ行つて被居い。」と、ギイナは娘を去らせて、ヤルマアの後から良人の居間へ入つた。ヘドキツヒは、唇を嚙んでちつと立つてゐたが、小さい拳を握り詰めて、「あゝ鳴。」と小聲で言つた。そして、本箱から短銃を取り下して、家根裏の戸の間へ迂り込んだ。戸はもとの通りに閉ざされた。

五の四

ヤルマアは愈々家を出るとなると、書籍を初め、いろ／＼持つて行かなければならない物が多いので、靴ひとつでは入りきらないので、少からず弱つた。ギイナは靴を持つて、その後から跟着いて歩きながら、「着替への襯衣と袴袴下だけ持つて行つて、その他は、當分の間残して行つたら可からう。」と言つた。ヤルマアは外套を脱いで、長椅子の上へ投つて、「ふうッ！」と息を吐いた。そして

「珈琲が冷めますよ。」と妻に言はれたので、迂濶ひと口飲んだ。そして、もうひと口飲んだ。ギイナは椅子の脊へ采配を掛けながら、「けれども、これ丈兎を入れて置けるやうな、大きな家根裏は却々見附かりますまい。」と言つた。「何だ。こんなものも、一緒に持つて行けと言ふのか。」と、ヤルマアは呆れて言つた。「でも、お祖父様は、兎がなければ、一日も被居れないんでせう。」「お祖父様だつて、我慢するのさ。私は兎なんかよりは、もつと大したものを犠牲にしてゐるんだから。」と云つた。ギイナは本箱に采配を掛けながら、「笛を靴へ入れて置ませう。」と云つた。「笛なんぞは要らない。その代り、短銃を呉れ。あの彈丸の入つた短銃を。」「短銃なんか、持つて行くんですか。」と、ギイナは心配さうに訊いた。そして本箱の上を捜したが、見つからないので、「ありませんね。お祖父様がお持ちに

なつたのでせう。」と云つた。

『家根裏に被居るのか。あゝ、お氣の毒な老人だ。』

ヤルマアは斯う言つて、麵包に牛酪を付けた。珈琲も飲み干して了つた。

『ねえ、あの部屋が空いてると、彼處に被居つても可いんですね。』とギイナが言ふと、

『お前達と、同一家根の下に住むのか。そいつは御免蒙らう。』とヤルマアが云つた。

『それでも、一日二日なら我慢が出来るでせう。誰れもお傍へ行きませんか。』

『いゝや、私はこの家には居ない。』

『では、階下のレリングさんや、モルキツクさんの所へ。』

『彼奴等の、名前も聞かして呉れるな。あんな奴等のことは、考へた丈でも飯がまづい。私はこれから、吹雪の中へ出掛けて、一軒々々、お父様と自分の爲

めに、家を探して非かなきやならない。』

『でも、帽子がないんでせう。昨夜失くしたつて言つたぢやありませんか。』

『彼奴等、仕様のねえ奴だ。帽子は買はなきやなるまい。』と麵包を取つて、牛酪を付けた。『兎に角、どうにかしなければならん。豈乎、こんな事で死んぢまつちやあ詰らないからね。』と言ひながら、彼れは、盆の上を探した。

『何です。』と、それを見て、ギイナが訊いた。

『牛酪。』と、ヤルマアが答へた。

『一寸待つて下さい。直ぐ取つて來ますから。』と言つて、ギイナは勝手へ行つた。

『あゝ、もう可い。乾いた麵包で充分だ。』と、ヤルマアは妻の行つた後で言つた。

ギイナは、新規に牛酪の皿を持つて來た。そして言つた。

『これ、こんなに新らしい牛酪なんですよ。』

ヤルマアは、長椅子へ腰を掛けて、もう一度麵包へ牛酪を塗り直して、新規に注いで貰つた珈琲を飲んだ。少しの間、黙つて飲んだり喰べたりしてゐた。『誰れにも邪魔されずに、どんな邪魔も入らずにだね、一日か二日部屋に置いて貰へまいか。』と、やゝ良人の心は弛んで來た。

『えゝ、もうそれは、貴方さへ宜しければ。』と、ギイナは優しく云つた。

『こんなに急では、迎もお父様のものを、悉皆持ち出す事は出來ないからね。』

『それから、貴方は、あの方に、今後、妾どもと一緒に居ないといふ事を、さう被仰らなければならぬのでしよ。』

『うん。それも然うだ。』と、良人は珈琲茶碗を突き出して、『私はすべての事情をお父様に話さなければならぬ。それには、もう一遍この事を調べなければねえ。ひと息する隙も欲しい。これ丈の荷は、一日ぢやあ迎も呑負ひきれな

501

『おまけに、今日はお天氣が悪うござんすからね。』とギイナが言つた。

やがて、ヤルマアは、エルレエの手紙を手に取りながら、

『あの證文は、あの儘になつてゐるんだろ。』

『えゝゝ、妾、手もつけませんわ。』

『無論、私にだつて紙屑も同然だ。』

『妾だつてさうですわ。それを、役に立てようなんとは思ひませんもの。』

『うん、さうだ。だがね、失くさないやうにする方が可い。移轉でもするやう

だと、ツイ紛れ込み易いからね。』

『妾が、お預り申しませう。』

『うん。宛名はお父様なんだから、受取るとも受取らないとも、あの人次第な

んだ。そこでと、念の爲に、——糊は何處だい。刷毛は。』

『此處にありますよ、貴方。ほんとにお氣の毒なお親父様——』とギイナが言つた。

ヤルマアは、昨日自分が引き裂いた證書の破れ目に、紙を裏打ちして、それ

を繼いだ。そして、それをギイナに渡すと、間もなくグレエゲルスの入つて來るのを見た。グレエゲルスは意外な面容で、

『ヤルマア君。君、此處に居たのか。朝飯を喰べて居たのかい。』

『うん、僕はぐたくになつちやつたんだ。』と慌て、立ち上つた。『それに身體だつて、何か欲しくならうからね。』

『で、君は、どうする積なんだね。』

『僕のやうな人間には、爲る事は一つしきやない。この通り、今緊要なものでけ包んだ所さ。だが、これも時を要するのでね。』ギイナは焦つたさうに、

『お部屋の支度をしませうか。靴を包みませうか。』と訊いた。ヤルマアはハタと當惑したが、グレエゲルスの方をチラと見た後で、『包んで呉れ。それから、部屋も支度してお呉れ。』と云つた。

ギイナが居間へ入つた後で、グレエゲルスはぢつとして居たが、やがてヤルマアに、『實際家を出るのか。』と訊いた。そして、『家に落着いて、發明の爲めに

努めなければなるまい。』と言つた。ヤルマアは顔を擧めて、

『もう、發明のことは言はずに呉れ給へ。君は一體何を發明させようと言ふんだい。大概の發明は、もう皆他人がやつて居るよ。そして、日ましに難しくなる許りだ。』

と、急に一變したことを云ひ出した。

『それなのに、君は、あんなに努力して居たのか。』

『僕にそれをやらせたのは、皆、あのレリングの碌でなしなんだ。寫眞術に關して、發明をするやうな目論見を立てさせたのはね。』

『あゝ、レリングなのか。』と、グレエゲルスは、思ひ當つた様子であつた。

『心から、それを信じて、幸福に思つてゐた程、僕は愚かだつた。發明の爲めではない。ヘドキツヒが信じてゐて呉れたからだ。僕は今眼がさめた。僕を妨げるものはあの娘だ。あの娘が、僕の生活から日光を奪ふのだ。』

『あの娘が？君はヘドキツヒの事を言つてるのかね。どうして又、あの娘さん

が、君の日光を奪ふのだらう。』と、グレエゲルスは腑に落ちぬ様子で、斯う訊いたが、ヤルマアはそれには答へず、

『僕はね、口に言はれない程、あの娘を愛してゐたのだ。だから、僕はあの子も亦、それ程僕を愛してゐるものと、夢見てゐたのだ。處が、今になつて見れば、或はヘドキツヒは、僕をほんたうに愛した事はないんだと疑ふね。』

『君、もしあの娘が、君に對する愛の證據を見せたらどうする？』と云ひ掛けたが、グレエゲルスは不圖耳をそばだて、

『鴨がどうかしたやうだが。』と云つた。

『なあに、鴨が鳴いてゐるんだ。親父が家根裏に居るので。』

『えッ、お父様が？君、ヘドキツヒが證據を見せるよ。あの誤解された可憐さうなヘドキツヒが。』と、グレエゲルスは、嬉しきうに斯う言つた。

『證據？そんな事に信が置けるものか。ねえ君、ギイナとゼルビイ夫人は、此處に坐つてゐて、内密話もすれば、打明話もする仲なんだ。それを、いつでも

ヘドキツヒが傍で聞いてゐるんだ。あの證書だつて、突然來たものではないと思はれるんだ。彼奴等が、黄金の餌を投げれば、ヘドキツヒは行つて了ふよ。』

と言つてゐる時、家根裏から、轟然一發の銃聲が聞えた。

『あゝ、親父が獵をしてゐる。ドレ、一寸行つて見て來ようか。』と云つて立ち上るヤルマアを捉へて、グレエゲルスは、

『待ち給へ、ヤルマア君。君は一體、あれを何だと思ふ。あれが證據だよ。あの娘が君に愛して貰ひ度さに、一番大切な鴨を、お祖父様に射つて貰つたのだよ。』と云つた。

それを聞いたヤルマアは、急に優しくなつて、『あゝ、ヘドキツヒ、ヘドキツヒは何處へ行つた。早くおいで。』と、其處らを探し廻つて見たが、『おや、居ないよ。』と不審を打つた。すると、妻のギイナは、

『貴方は、こゝの家へ居ては可けないと被仰つたんですもの。』

と云つて、鼻を詰らせた。グレエゲルスは、ヤルマアの容子を見て、

『あの娘が、一切を舊通りにするだらうと、僕は信じてゐたよ。』と言つた。

その途端に、エクダル老人が、制服を着て、劍の扣子を俵めようとしながら、自分の部屋から出て来た。そして、喫驚したヤルマアの顔を見上げながら、少し憤然とした口吻で、

『ヤルマア、お前は一人で獵に行くんだね。』と、不平らしく云つた。

『貴方ではないんですか。今射つたのは。』

『なに、私が射つたつて。』と老人が答へた。すると、傍から、

『あの娘が、自分で鳴を射つたのだ。』とグレエゲルスはヤルマアに言つた。

ヤルマアは驚いて、

『えッ。』と言つた儘、家根裏へ入つたが、やがて、『ヘドキツヒ、ヘドキツヒ、あッ?』と叫ぶ聲がした。ギイナとグレエゲルスも、あの後に續いて入つた。娘は家根裏の床の上に倒れてゐた。

『おう、あの娘も獵に行くのか。』と、エクダル老人は微笑んだ。

ヤルマア夫婦とグレエゲルスは、娘を抱いて来て、長椅子の上に寝せた。そして、醫者のレリンググを呼び立てた。レリンググは、モルキツクと一緒にやつて来た。醫者はすぐ様、卓子を片寄せて、娘の身體を診た。ヤルマアは傍に蹲んで、氣遣しげに醫者の顔を見て、

『大丈夫だね、レリンググ君。大丈夫だらう。血は少しも出ないんだよ。え、君。』と訊いた。

『どうして、こんな事になつたんだ。弾丸は胸に入つてゐる。』

『え、でも君、もう氣が付きさうになつて居るぢやあないか。』

『見給へ。ヘドキツヒはもう駄目なんだよ。』と、醫者は淋しく答へた。

ギイナは、聲を立て、泣いた。ヤルマアは狂氣のやうに、レリンググに縋つて、『もう一度、せめては、僕がどれ程娘を愛してゐたかを聞かせてやる丈の間で、命を取り止めて呉れるやうに。』と掻き口説いた。心臓貫通、内部出血、即

死。ヤルマアの頼ひは空しかつた。レリングは、だらりと下つた手の先の短銃を放させようとして、

『お、確かり掴んでゐる。固い、恐ろしく固い。』と云つた。

『レリングさん、およしなさい。指に傷がつくと可けませんから、短銃はその儘にしてお置きなさい。』とギイナが頼んだ。

『あ、それは、この娘に持たせてやらう。』とヤルマアが言つた。

『森が復讐をするんだな。私は恐れはせんぞ。』と、エクダル老人は斯う言つて、家根裏へ入つて行つた。ヤルマアが、

『ギイナ、お前こんな事があつても、生きて行かれるのか。』と云ふと、妻は、

『これからは、お互ひに扶け合ひませう。ねえ、何と言つても、この娘は二人の者ですから。』と云つた。そして、二人して子供を手舄きにした。

『神よ。爾は地に歸るべし。』——以前神學生であつたモルキツクは、襟飾もつけない、上衣の前をはだけ、兩手を擴げて、『爾は地に歸るべし。』と云つた。

これを聞いたレリングは、

『馬鹿。静かにしろ、酔拂ひ。』と云つて、モルキツクを叱りつけた。モルキツクは、ふら／＼として部屋を出て行つた。

『どうも、短銃が偶然發火したものは受け取れませんね。』

と、レリングはグレエゲルスの傍へ寄つて言つた。グレエゲルスは、恐ろしさに顔の肉を引き吊らせて、立つてゐたが、辛とのことと、

『何故こんな事になつたか、判るもんですか。』と云つた。レリングが、

『ねえ、衣服の胴の所が焦げてゐるのです。屹度筒口を胸に當て、射つたものですか。』と云ふと、グレエゲルスは、

『ですが、ヘッドキツヒの死は、冗てはありません。この悲しみに依つて、ヤルマアの有つてゐる尊いものが、自由にされると言ふことに氣が付きませんか。』と云つた。

『それは目前に死を見るとね、大概な人間は向上されまきさあ。だが、そいつが

何時まで續くと思ひます。』と、レリングが問ひ返した。

『一生續いて、發達するでせう。』

『なあに、一年持ちますまいよ。まあ、ヘドキツヒは、あの男には朗讀に好い題目になる外、何でもなくなるでせう。』

『どうして君は、ヤルマア・エクダルの事を、そんな風に言ふんですか。』

と、グレエゲルスが躍氣となつて問ひ掛けると、醫者レリングは冷やかに、

『そんなお話は、あの娘の墓の上で、草が一通枯れてからにさせよう。ねえ、

その時になれば、あの男は、「子供は父の胸から餘りに早く奪はれた。」つて、大袈裟な事を言ひますよ。そして、例の自己感歎と自己憐愍の甘い中へ浸つて居てせう。マア、見て被居い。』と云つた。

『君のいふことが、正しくつて、僕のいふ方が間違つてるとすると、人生は生きてゐる甲斐のないものだ。』と、グレエゲルスは苦々しい調子で言つた。

『何に、人生はそんなに堪へられるものではありませんよ。吾々貧乏人の所へ、

理想の要求なんぞ持つて、責りに来る氣の變な取立人さへなければね。』

と、レリングが答へた。グレエゲルスは自分の前をぢつと見詰めて、

『そんなら、僕は自分の運命を甘受しよう。』と云つた。すると、レリングは、

『失敬だが、貴君の運命と言ふと。』と聞くと、グレエゲルスは、部屋を出ようとして、

『食卓の十三人目です。』と言つた。レリングはこれを聞いて、『何だ下らない。』と言つて、傍を向いた。

鴨 終

大正三年九月十五日發行

(定價金拾錢)
(郵税金未納)

著者 村上靜人

發行者 赤城正藏

印刷者 中田禎三郎

印刷所 秀英舎第一工場

第三十三編
鴨

ア カ キ 叢書

發兌 賣捌

元 所

東京市麹町區三番町五〇番
常盤橋町二二八〇番
振替口座東京一〇四三二

赤城正藏

全國各書林

○第七編	○第六編	○第五編	○第四編	○第三編	○第二編	○第一編
叢話	文藝	文藝	社會學	文藝	叢話	文藝
三浦文學士篇	村上靜人著	原ドストイェフスキイ	ルボン原葛西文學士譯作	ダヌンチオ原日野月文學士編	中島文學士編	イブセン原村上靜人編
▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
ベルグソンの哲學	ウエントと其著作	痴人	群衆心理 (上卷)	廢都	プラダグマチズム	人形の家 (一巻)
▼	▼	▼	▼	▼	▼	▼

アカギ叢書

毎月數篇 逐次刊行
 (定價金拾錢 郵稅各貳錢)

ムラクレ	アカギ	の本日
<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	特色	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
<p>○紳士の標準智識○</p> <p>1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを聚取し解説せり</p> <p>2. 従前の刊行物の高價、尅大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも開せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを憂ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり</p> <p>3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし</p> <p>○世界學術の叢淵○</p>		
<p>◀ 也 錢 拾 金 僅 冊 各 ▶</p>		

○第八編	歐洲文藝	オスカア・ウワイルド	村上 静人 譯	▲	サ	ロ	メ
○第九編	哲學叢話	中島文學士編	▲	オ	イ	ケ	ン
○第十編	博物叢話	寺尾理學士編	▲	イ	ダ	ン	の
○第十一編	日本史談	龍居文學士著	▲	文	政	化	江
○第十二編	歐洲文藝	フライタツハ	齋藤文學士編	▲	喜	劇	新
○第十三編	歐洲文藝	スチヴンソン	齋藤文學士編	▲	壺	の	鬼
○第十四編	歐洲文藝	トルストイ	村上 静人 編	▲	復	活	
○第十五編	歐洲文藝	(絶版發賣禁止)	▲	レ	デ	イ	ー
○第十六編	美術叢話	佐々木文學士著	▲	奈	良	の	美
				▲	術		

○第十七編	歐洲文藝	モーパッサン	村上 静人 編	▲	女	の	一
○第十八編	歐洲文藝	メーテルリンク	村上 静人 編	▲	モ	ン	ナ
○第十九編	日本史談	龍居文學士著	▲	日	本	建	築
○第二十編	社會學叢話	ル・ボノン	葛西又次郎 譯	▲	群	衆	心
○第二十一編	美術叢話	桑山文學士編	▲	支	那	の	美
○第二十二編	歐洲文藝	板垣文學士編	▲	ワ	ン	ダ	ー
○第二十三編	歐洲文藝	ストリンドベルヒ	村上 静人 編	▲	父		
○第二十四編	歐洲文藝	村上 静人 編	▲	ハ	ム	レ	ツ
○第二十五編	歐洲文藝	ダマシオ	日野月文學士編	▲	全	ジ	ヨ
				▲	バ	ン	ニ
				▲	(上	卷)	

○第廿六編

文藝 歐洲 全

全 ジョバンニ (下巻)

○第廿七編

文藝 歐洲 村上 静人 編作

神 鎌倉の史話 曲

○第廿八編

史談 日本 龍居 文學士 著

鎌倉の史話

○第廿九編

文藝 歐洲 板垣 文學士 編作

ユーデー ト

○第卅編

文藝 歐洲 ビエトロ・コッサ 編作

皇 帝 ネロ

○第卅一編

禮節 叢話 獨逸 大使館 員 著

歐 洲 禮 節

○第卅二編

文藝 歐洲 イブセン 原 編作

海 の 夫 人

○第卅三編

宗教 叢話 東北 大學 講師 正 編師

オイケン の 宗 教 思 想

○第卅四編

地理 叢話 マルコポーロ 原 編作

東 方 見 聞 錄

○第卅五編

文藝 歐洲 トルストイ 原 著

ドストイエフスキイ 論 附モウパッサン 論

○第卅六編

文藝 歐洲 ストリンデルヒ 編作

絆

○第卅七編

文藝 歐洲 トルストイ 原 編作

暗 の 力

○第卅八編

文藝 歐洲 シヨウ 原 編作

武 器 と 人 (チヨコレツト兵隊)

○第卅九編

文藝 歐洲 イブセン 原 編作

鴨

○第四十編

歴史 叢話 小文 林 愛 雄 著 士

神 話 と 傳 説

○第四十一編

文學 歐洲 ブーデルマン 編 作

マダダ (故郷)

○第四十二編

文藝 歐洲 ドストイエフスキイ 編

虐げられし人々 (上巻)

○第四十三編

文藝 歐洲 ツルゲニエフ 原 編 作

初 戀

○第四十四編	演藝叢談	小林愛雄	著	西洋演劇史
○第四十五編	歐洲文藝	フロオベル	原作	サランボ
○第四十六編	音樂叢話	小山文學士	著	日本淨瑠璃史
○第四十七編	歐洲文藝	モーパッサン	原作	ピエール・と・ジアン
○第四十八編	歐洲文藝	ダヌンチオ	原作	死の勝利
○第四十九編	歐洲文藝	シエンキウイツ	原作	何處へ行く
○第五十編	歐洲文藝	ドストイエフスキ	編	罪と罰
○第五十一編	歐洲文藝	ドオデ	編	サフオ
○第五十二編	歐洲文藝	ドストイエフスキ	原作	虐げられし人々
		加藤朝鳥	編	(下巻)

○第五十三編	歐洲文藝	ハウプトマン	原作	日の出前
○第五十四編	歐洲文藝	ホフマンスタール	原作	エレクタ
○第五十五編	歐洲文藝	ゲイテ	原作	ヘルマントドロテア
○第五十六編	歐洲文藝	イブセン	原作	幽霊
○第五十七編	歐洲文藝	ゾラ	原作	女優
○第五十八編	歐洲文藝	ヘツベル	原作	マリア、マグダレーネ
○第五十九編	歐洲文藝	シヨウ	原作	ウォーレン夫人の職業
○第六十編	歐洲文藝	ツロオベル	原作	マダム・ボバリ
○第六十一編	歐洲文藝	文學士魚澄	五郎著	新文明源流
				(日本洋學の發達)

274
976

- 第六十二編 歐洲文藝 文學士 佐々木青葉村著 ▲日本の彫刻
- 第六十三編 歐洲文藝 文學士 齋藤茂編 ▲シガーザ一傳
- 第六十四編 歐洲文藝 イエーッ原作 ▲幻の海 附イエーッ詳傳
- 第六十五編 歐洲文藝 山本有三 ▲名譽
- 第六十六編 歐洲文藝 東北大學講師 佐藤正著 ▲近世社會運動
- 第六十七編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (上卷)
- 第六十八編 歐洲文藝 トルストイ原作 ▲アインナ、カレニア
- 第六十九編 歐洲文藝 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (下卷)

● 頒布部數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

終

